

英雄叙事詩『ジャンガル』における七冲の痕跡

——ジャンガルが7歳のときに権力を掌握する
モチーフについて——

藤 井 麻 湖

1. 序論
2. エルヒー・メルゲン話群の考察
3. エルヒー・メルゲン話群から『ジャンガル』へ

1. 序論

1-1. 本稿の目的と議論の流れ

本稿の目的は、表題にあるように、英雄叙事詩『ジャンガル』には易学における七冲——対冲とも呼ばれる——の概念が認められることを仮説として提起することである。七冲とは、十二支におけるある支と、その支から数えて七番目に該当する支の組み合わせを言う。七冲は対冲とも呼ばれる。七冲は、モンゴルの「伝統的」婚姻儀礼における男女の取り合わせにおいて回避される年回りとして民間のなかで認識されてきた。モンゴルでは、この七冲の概念はハルシュ・ジルテイ харш жилтэй と呼ばれている。英雄叙事詩『ジャンガル』においては、主人公ジャンガルが“7歳”のときに、幼馴染であるホンゴルと一緒に、アルタン・チェージを服属させる。このアルタン・チェージの服属によって、ジャンガルの権力は確立する。本稿では、この“7歳”が、七冲という概念につながる歳ではないかという仮説を提起するものである。

その仮説を裏付けるため、本稿では次のような流れで議論を進めることにしたい。まず、1. においては序論として、本稿での議論の前提となる『ジャンガル』についての考察のあらましを述べる。その上で、どのような『ジャンガル』の伝承が考察対象として選択されるべきか、また、その選択された伝承における“7歳”という歳の現われる箇所をテキストで確認しておく。

2. においては、『ジャンガル』に七冲の概念が用いられていることを傍証するために、七冲の概念が美しく織り込まれている「親指・射者」と訳しうる『エルヒー・メルゲン』という物語を取り上げて、七冲が具体的にどのように織り込まれているかを提示する。『エ

ルヒー・メルゲン』は一般に神話に分類されているが、この物語における主人公エルヒー・メルゲンは、モンゴルでも有名な英雄叙事詩『男の中の男ハン・ハランホイ』の主人公ハン・ハランホイと「兄弟」であるという風説があり¹、『エルヒー・メルゲン』は英雄叙事詩と密接な関係にあることが暗示されている。とくに、『男の中の男ハン・ハランホイ』は、モンゴルの英雄叙事詩においても、語るときには夏ではなく冬に語らなければならない、あるいは天窓を閉めて語らなければならないなど、強いタブー性を伴う英雄叙事詩である点で、注目すべき英雄叙事詩となっている。また、『ハン・ハランホイ』は、『英雄叙事詩の王様』とも呼ばれてきた伝承であることも付け加えておきたい。

『エルヒー・メルゲン』には多くのヴァリエントが存在するが、美しい七冲が認められる話は現在私の手元にはひとつしかない。七冲関係の認められない他のヴァリエントはどのように形成されたのか。2. においては、この問題を検討する。

3. においては、ふたたび『ジャンガル』にもどり、七冲関係を認めた場合に、『ジャンガル』研究にいかなる新たな視点を提起できるかについて述べたい。とくに、ここにおいては、七冲の観点から勇者関係を読み解く可能性を考察する。

最後の4. においては、七冲の観点から『ジャンガル』の勇者関係を読み解くさいには矛盾点もあることを指摘し、そのような矛盾点をどのように考えるべきかについて補足したい。

1-2. 『ジャンガル』における「12」と「13」

『ジャンガル』は、モンゴルの英雄叙事詩において、多くの伝承をもつ巨大叙事詩群をなしている英雄叙事詩である。その主たる伝承地域は、ロシアのカムイクと中国新疆ウイグル自治区である²。カムイクの語り手エーリヤン・オブランは、カムイク・ジャンガルのなかで最も多くの物語を語った語り手として著名な語り手であるが、彼の語った“序”や“アルタン・チェージとジャンガルが戦った章”は、当該英雄叙事詩の「主人公」たるジャンガルがアル=ボンビーン=オロンと呼ばれる国（あるいは領地）の支配者“となった歳を“7歳”としている。アル=ボンビーン=オロンを、現在のところ、当該叙事詩の研究者の多くは、いかなる歴史的場所としても同定されえない「架空の理想郷」として理解している。このアル=ボンビーン=オロンが、当該英雄叙事詩の圧倒的多数の物語において各種の敵から命を賭けて守るべき故郷となっており、故郷の攻防が当該叙事詩全体にわたる主要テーマになっていることを考慮に入れると、この場所についての考察はもちろんのこと、アル=ボンビーン=オロンの支配権を確立したジャンガルの“7歳”という歳を検討することは意味のあることであろう。

モンゴルに伝承されている英雄叙事詩を中心とする幾つかの物語の考察において、筆者はそこに現れる数詞が単に数を表す以上の象徴的な意味を担わされている事例を分析し、その意味を解明することに努めてきた（藤井 2001、2003a、2003b）。むろん、モンゴルの

物語に登場する数詞の象徴性については従来多くの研究者が言及しており、数詞の象徴性の指摘そのものは決して新しいものではない。私が新しい知見を加えた点があるとすれば、こうした数詞の象徴性が、“物語の部分”に関わるような単純な象徴性ではなく、“物語全体”にわたって影響力をもつような象徴性を担わされていることを提示したことにあるといえるだろう³。

とくに、本稿に関係する論として、英雄叙事詩『ジャングル』において、ジャングル率いる“12勇者”についての考察を挙げておきたい（藤井 2003a：483-607）。なぜならそこで結論として出てきたのは、“12勇者”という表現が一般に理解されているような勇者の人数ではないというものであったからである。この考察においては、ジャングルの盟友であるところの“12勇者”は、一般的に理解されているような「12人」ではなく、「12と呼ばれる勇者」、しかもこれが「アルタン・チェージ」という英雄叙事詩『ジャングル』において、ジャングルの幼馴染で腹心として活躍するホンゴルという名の花形勇者と並んで有名な、ジャングルの参謀役である勇者を暗に指している可能性を論じたのであった。つまり、この“12勇者”がたった一人の勇者しか実は表していないのではないかという考察は、『ジャングル』がジャングルを中心とする盟友たちの物語であるとしてきた従来の見解に再検討をせまるものになる。“12勇者”の“12”という数詞の象徴性は、部分でなく、全体にかかわるものとなっているのである。

ところで、アルタン・チェージという勇者が「12」という数字で標識された理由としては、今触れた、ジャングルの幼馴染で腹心の「ホンゴル」という勇者が「13」という数字で標識付けられていることと関係していることが考えられる。つまり、12=アルタン・チェージ、13=ホンゴルとそれぞれの勇者がそれぞれの数字と重ねあわされており、ホンゴルがアルタン・チェージよりも優位にあることを数字とその数字の配置によって暗示させているのである。ただしこのような隠喩が成り立つためには、アルタン・チェージの座席である右（西）の座席が、ホンゴルの座っている左（東）の座席よりも社会的に優位にあることが現実の生活世界において認識されていなければならないという条件がある。そうでなければ、このような隠喩が敢えて埋め込まれる必要性がないからである。換言すれば、12=アルタン・チェージ、13=ホンゴルにおける12や13という数字が隠喩として意味をなすためには、アルタン・チェージの座っている右（西）が左（東）よりも優位に理解されている必要があるということである。

実は、“12勇者”の考察では、厳密に言うと、ホンゴル以外に、グゼーン・グンバヤサナルという勇者——この二人も当該英雄叙事詩でよく知られた勇者である——もまた少ない事例とはいえ13で標識付けられる場合があることが観察された。とはいえ、「13」で標識付けられる勇者が同一伝承内で複数いることはなく、「13」はつねに唯一の勇者を指示していることが判明した⁵。

1-3. 『ジャンガル』における“7歳”

本稿の目的は、ジャンガルがアル=ボンビーン=オロンの支配権を確立した“7歳”の7という数詞には、易学において七冲と呼ばれる概念に関係するのではないかという仮説を提示することである。七冲というのは、十二支のなかで、自分の支から数えて七番目の支は、自分の支と敵対するという考え方である。たとえば、子は、子から数えて七番目に当たる午と七冲にある。こうした七冲の組み合わせは全部で6組あり、すなわち、子と午、丑と未、寅と申、卯と酉、辰と戌、巳と亥である。七冲は、モンゴルの生活世界においても観察され、とくに、「伝統的」な婚姻の縁組において七冲関係にあたる男女を結婚させることを避けていたことはよく知られている。七冲をモンゴル語では「ハルシュ・ジル（ぶつかりあう年まわり）」と呼んでいる。これにたいして奨励されていたのは、「イウエール・ジル（相性のよい年まわり）」であり、これは易学における「三合」に対応する。すなわち、四つ違いの支の組み合わせであり、全部で4通りある。すなわち、子と辰と申、卯と未と亥、午と戌と寅、酉と丑と巳である。

先に、アルタン・チェージ=12、ホンゴル=13とする隠喩が『ジャンガル』に隠されているとしたが、そもそも、二人の勇者の優劣の関係を12と13の関係性として表そうとした背景には、筆者は十二支が関係しているのではないかと考えている。なぜならば、13というのは、1から始まった支が一巡してもとの支にもどってくる数となるが、12は1から始まった起点から考えると、最後の支となるからである。つまり、12は十二支の最後の支であるが、13は起点となる最初の支ということになるのである。こうして、12と13という数詞を対比させることは、時間の終点と始点との対比を表すことであり、つねに始点のほうが終点よりも優位に立つことを示すのである。

本稿で提示しようとすることを図示すれば、図1になる。ここで、アルタン・チェージ

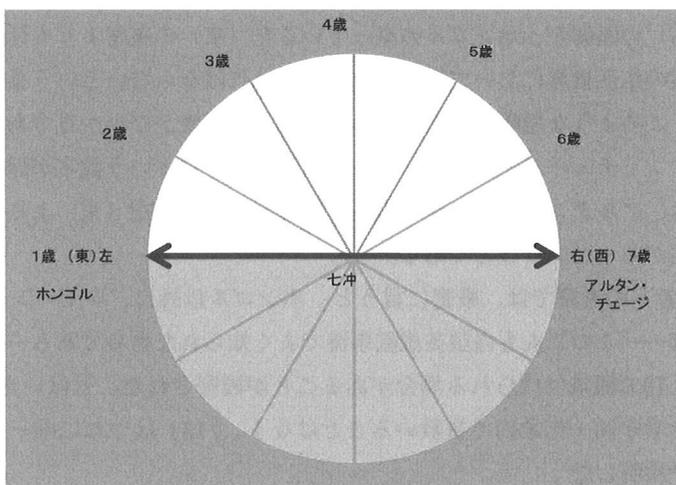


図1：『ジャンガル』におけるホンゴルとアルタン・チェージの関係

は右側（西）の酉の位置にあるが、この位置は、ホンゴルの位置する左側（東）の卯から数えて七番目の沖の位置に当たっている。

1-4. カルムイク・ジャンガルにおける“7歳”

カルムイク・ジャンガルのエーリヤン・オプランの「アルタン・チェージとジャンガルが戦った章」において、“7歳”でアルタン・チェージを配下に入れた顛末は次のようなものである。ジャンガルが5歳の歳に、ホンゴルの父であるブフ・ムンゲン・シグシルゲはジャンガルを捕虜に取る。そのさい、ジャンガルを観察すると、「この太陽のもとの生き物を我が物とするような大きな運命をもった人間⁶」であることを知り、早い時期に抹殺してしまおうと思い、ジャンガルが6歳のときに、アルタン・チェージの8万頭の馬群を追わせにジャンガルを派遣する。6歳の状況をまず見てみよう。なお、重要な箇所は下線にしてある。行の切れ目は／で記した。

主人ジャンガルは／たっぷり3×7日間で／この馬群を追い立てたときに／バイン・クンケン・アルタン・チェージは／オルマン・アグサグ（気性の激しい）・オラーン（赤）（馬の名前——筆者注）に鞍をつけさせて／この私の青い額に白い斑点のある馬群に／近づいて追い立てた人間は／トゥブシュン・シルケグの息子／ブフ・ムンゲン・シグシルゲの場所から来た／誉れ高き領主ジャンガルであるらしい／7歳のときに私の力をそぎ／引き入れることになっている／いまは、6歳であるのに、と言って／扉ほどの幅のある青いキブル矢筒を取り出して／アグサグ・オラーンに乗って／3×7日ほどたって／火の真昼の最初に追いついてきた／三つの河の向こうから射た／扉ほどの幅の青いキブル矢筒の矢は／その肩を通過して、動脈を切って出て行った／意識を失って、落馬しそうになったその身体は／海千山千の茶目っ気のある素晴らしいゼールドが／落とさずに去って／ブフ・ムンゲン・シグシルゲの土地に向かって逃げて／建物の銀の扉のところに／愛するジャンガルを連れてきた（Жарһп 1990: 18-19）。

次は7歳のときの描写である。

そうこうしているときに／主人シグシルゲが戻ってこなかったときに／シルテイ・ザンダン・ゲレル（シグシルゲの妻でホンゴルの父である——筆者注）は／二人の息子をこっちだよと呼んで／主人シグシルゲはいままでどうしたんだろう／追いかけて行って探してきて、と言った／アランザル・ゼールドとクク・ガルザンに鞍をつけさせて／戦いの多くの種類の武器を背負って／いろいろな美しい服を着て／この二人の息子が出発して／シルテイ山のふもとに到着すると／シグシレグをしばりつけて／その黒い馬をひいて去って行ったところであった／右と左から二人が騒いでやって来ると／クンケン・アルタン・チェージが観察をしていて／この誉れ高きジャンガルとアラク・

オラン・ホンゴルの二人が／一緒になったとき、降伏するのだ、と言って／シグシルゲの縄をほどいて／二人の勇者を迎え入れた (Жаңһр 1990: 20)。

以上のように、「アルタン・チェージとジャンガルが戦った章」には“6歳”でアルタン・チェージの馬群を追い立てに行ったが失敗し、その次に行ったときにアルタン・チェージを支配下に入れる。実は、上記の引用で確認できるように、支配下に入れるのが“7歳”と明示されているわけではない。とはいえ、先の引用におけるアルタン・チェージの発言を踏まえると、この叙述を“7歳”のときの事件として捉えることができる。ただし、カルムイクのエーリヤン・オブランの『ジャンガル』の序における叙述は、この章のものとは異なっている。序は次のような具合になっている。

宝の最初の時に生まれた／この多くの仏たちの信仰が広まったときに生まれた／タク・ゾラ王の残ったもの／タンサグ・ボンバ王の孫（もしくは男兄弟の子供——筆者注）／ウズン・アルダル王の息子／一代で孤児のジャンガルである／より勝った爪あるものに／荒々しいシャル・マンガス（怪物）に故郷を攻められて／孤児となって残った／3歳に入る歳に／アランザル・ゼールド馬が3歳の歳に／脚を上げて馬に乗った／3つの大きな要塞の入り口を破壊した／ゴリジン・イフ・マンガス（怪物）王を自分の版図に入れた／4歳に入る歳に／4つの大きな要塞の入り口を破壊して／ドウルドゥン・イフ・シャル・マンガス王を版図に入れた／強い5歳になるときに／タキン・タウン（5）・ショラム（妖怪）王を／言葉をとらえて、版図に入れた／その5歳のときに／ブフ・ムンゲン・シグシルゲに捕まえられ／捕虜となった／6歳にはいる歳に／6つの要塞の入り口を破壊し／百本の槍の先を折らせて／絵となった建物をもっている／クンケン・アルタン・チェージを引き入れて／通常のとくさんの勇者たちとともに／右のリーダーとならせたのである／7歳の歳に下界の7つの場所の力をそぎ／ドータイ・ジャンガルという名を呼ばしめた (Жаңһр 1990: 9)

以上のように、序ではアルタン・チェージを降伏させる歳は6歳となっており、7歳ではない。とはいえ、7歳の歳に「下界の7つの場所の力をそぎ」という表現が見え、これ以降の歳には触れられていないので、7歳の歳に権力を確立したことは同じである。こうした齟齬の問題は詳しく検討しなければならないが、6歳と7歳との区別は確かに重要であることは、むしろ新疆ジャンガルの語り手アリンピルのテキストにおいて確認できる。

新疆ジャンガルのアリンピルの語りでは、カルムイク・ジャンガルのように、6歳のときにアルタン・チェージの馬群を追わせて失敗させ、一年後の7歳のときにアルタン・チェージが時満ちたとしてみずからジャンガルの傘下に降るといふ展開にはなっておらず、カルムイク・ジャンガルの6歳のときの出来事と7歳のときの出来事とが7歳のときの出来事としてまとめられているような内容となっている（塔重 1999: 53-63）。つまり、多

少の相違はあるとはいふものの、カルムイク・ジャンガルと新疆ジャンガル双方において、ジャンガルが7歳のときに、アルタン・チェージを配下に置くことを契機としてジャンガルの権力が確立されたことに焦点が当てられているとみてよいだろう。

両者の違いは、新疆ジャンガルと比べてカルムイク・ジャンガルにおいてのほうが、6歳と7歳との対比に留意して物語っており、7歳がより強調されていることにある。ここでは、6歳のときにはジャンガルがひとりでアルタン・チェージに向かっているのに対して、7歳のときにはジャンガルはひとりではなくホンゴルと一緒に、人質となった「ホンゴルの父であるブフ・ムンゲン・シグシルゲ」を奪い返しにやってくる。アルタン・チェージはジャンガルとホンゴルが一体となって自分に向かってくるのだから降るしかないと言っている。ここからみると、アルタン・チェージがジャンガルに降る理由には、ホンゴルの存在が大きいことが理解される。

以下では、ジャンガルが“7歳”のときにホンゴルの力を借りて、アルタン・チェージを服属させるというモチーフをテーマに考察をすすめることにしたい。次章においては、このモチーフのもととなったと推測される七冲の概念を織り込んでいるエルヒー・メルゲンの物語を考察する。

2. エルヒー・メルゲン話群の考察

2-1. エルヒー・メルゲンの基本話 (1)

まず、エルヒー・メルゲン（親指・射手）の物語を以下に記す。これは、モンゴル国のバヤンホンゴル県バイドラギーン・サンギーン・アジ・アホイの中心に居住するマイダリーン・ハルタルからツェレンソドノム氏が1983年に記録したものである（Цэрэнсодном 1989: 200）。

昔々、この世に7つの太陽が出て、旱魃になり、地の土壤が赤くなって、湖水が枯れて、木や植物が干からびて、人間や生き物が暑くてたまらなくなって、馬や家畜が乾きで朦朧となり、どうしようもなくなったという。そのとき、その土地に、エルヒー・メルゲンという「見たものを射抜く、射た物を命中させる」エネルギーな弓の名人がいたという。空に出た多くの太陽を、お前さん、命中させて射落としてくれよ、と多くの人びとが彼のもとにいて頼んだという。

男の中の男として生まれたエルヒー・メルゲンは、「親指に力がある、肝に胆汁がみちている、若い年頃の、熱い血潮をもつ人であったので、自分の弓術を過信して、「7つの太陽を俺は7本の矢でひとつひとつ命中させて射落とすことができなければ、親指を切って、男であることをやめて、水を飲まず草も食べないタルバガン（モンゴルに棲息するマーモット——筆者注）となって、真っ暗の穴で暮らそう」と口を滑らして、誓いを立ててしまったという。

そして、東から西にかけて空に連なっている7つの太陽を東から射っていったという。6本の矢で6つの太陽を射落として、7つ目の太陽を射ようと狙いをつけて呪文をとこなえていると、ツバメがその間に入って遮った。弓を引いたところ、ツバメの尻尾をかすって命中したので、金色のツバメの尻尾は2つに引き裂かれてしまったという。しかし、例の最後の太陽は弓を引く人を恐れて西の山の向こうにさっと隠れて入ってしまったという。

エルヒー・メルゲンは、ツバメが邪魔してくれたと、自分が乗っているハルツァガ・アラグ馬で追いかけて殺そうとしたところ、馬が言ったという。「薄明かり時から薄明かり時まで追いかけてツバメに追いつけなければ、私の脚と四肢を切って草原に捨てなさい。私は鞍をつけた馬であることをやめて、小さな丘で暮らします」と誓いを立てたという。

ツバメを追いかけて、まさに追いつこうというときに、ツバメはうまくかわして、なんとか追いつかれずに逃げ続けて、夜明けの薄明かり時にまでこぎつけたという。エルヒー・メルゲンは怒って、ハルツァガ・アラグ馬の前脚を切って、草原に捨て去ったところ、アラグ・ダーガ(跳兎)になってしまったという。アラグ・ダーガの前脚の脚が短いというわけはそれだそうだ。また、ツバメが薄明るい時に、馬に乗った人の前や後ろをまわりついて飛ぶのは、「いい男の鎧の下、悪い男のひげの下」と言って「私に追いつけるか追いつけるか」とからかっているからだそうだ。

エルヒー・メルゲンは、自ら、男の誓いどおり、親指を切って捨て、男であることをやめて、水を飲まず草を食べないタルバガンとなって、真っ黒の穴で暮らすようになったという。タルバガンの脚の指が四本であるのは、このことから生じたのだそうだ。また、エルヒー・メルゲンは、タルバガンとなったことを忘れて、夜や朝の太陽が出るころに待ち伏せていて、「太陽を射抜くぞ」と朝や夜の太陽が出る頃、自分の巣穴から出てくるのはこうしたわけなのだそうだ。また、タルバガンには「人間肉」といって、人間が食べてはいけない肉があるのは、エルヒー・メルゲンの肉だからだそうである。また、この世に残った一つの太陽は、エルヒー・メルゲンを恐れて、山のあちら側に入ってしまったので、昼夜が交代するようになったという(Цэрэнсодном 1982: 28-29)。

ここで登場するタルバガンという動物は、学名としては *Marmota* である(ルカーシキン1937: 1-2)。すなわち、マーモットであるので、鼠の一種と理解してよい。また、アラグダーガというのは中国で「跳兎」と訳されるもので(原山1999: 77)、ここでは、兎として理解しておく⁷。

具体的考察に移ろう。まず、東から西に7つの太陽があることを図示すると図2のようになる。東の位置は卯の位置であり、この卯を基点として、辰、巳、午、未、申と進み、

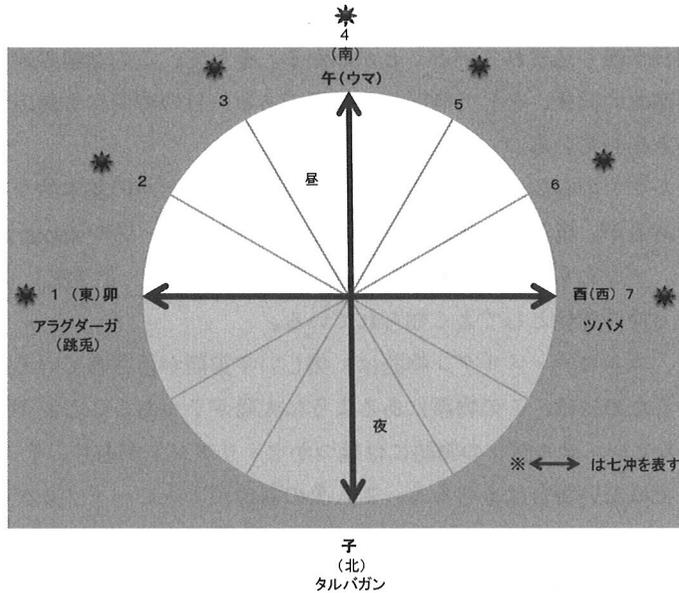


図2：エルヒー・メルゲンの基本話にみられる2組の七沖

最後の7番目の酉の位置は西の方角となる。7番目の太陽を射ようとしてツバメに遮られたというのは、この7番目の酉を意味するのであろう。このことは、ツバメが遮った時、太陽が西の山の向こうに入ったと語られていることから理解される。

次に、エルヒー・メルゲンは、自分のウマにツバメを追うように言うが、この時間帯は、日暮れの「酉」の位置から、「戌」、「亥」、「子」、「丑」、「寅」、「卯」までの時間帯すなわち夜の時間であったと考えられる。これを裏付けるように、エルヒー・メルゲンのウマは、ツバメに追いつくことができなかつたので、アラグ・ダーガすなわち「跳兎」になったとあり、「跳兎」は「卯」に重なる。アラグダーガは「跳兎」の意味であり、通常、ひとつの単語のアラグダーガであるが、テキストではアラグ・ダーガと分節して書いてある。ここには言葉遊びが隠されている。アラグは「斑の」、ダーガは「二歳馬」とそれぞれ別々に訳しうるので、ハルツァガ・アラグ馬すなわち「鷹・斑の・馬」がアラグ・ダーガすなわち「斑の二歳馬」に姿を変えることには、ひそかな言語的連続性が存在しているのである。

以上は、「酉」と「卯」が対沖の関係にあることを示している。これは、同時に、西と東にも重なる関係である。

エルヒー・メルゲンは、タルバガンというマームットになるので、「子」となる。エルヒー・メルゲンの乗っていたウマは、最終的にエルヒー・メルゲンに脚を折られるという点で、エルヒー・メルゲンに対立する存在となり、馬は「午」となって、「子」と「午」の対沖の関係が完成する。これは、同時に、北と南にも重なる関係である。

以上のように、エルヒー・メルゲンの物語には、「卯」と「酉」、「子」と「午」という2組の七冲の関係が織り込まれていることがわかる。そして、この2組の冲は、空間的な指標である東西南北の関係、そして時間的な指標である一日の時間にも対応しており、ひとつの宇宙を描き出している。

エルヒー・メルゲンの物語は、このように十二支における七冲の基本的な2組の冲関係を示したものであるが、現実の生活世界においては、ハルシュ・ジル харш жил として広く流布している。すなわち、「丑」と「未」、「寅」と「申」、「辰」と「戌」、「巳」と「亥」といった関係も七冲の関係としてよく知られている。

以上のように、エルヒー・メルゲン物語は、美しい宇宙観が示されているのであるが、このことがいえるためには、この物語にあるように太陽が7つあることが不可欠である。じつは、このエルヒー・メルゲンの物語には幾つかヴァリエントがあり、そこにおいては、太陽の数は7つではない場合はもちろん、主人公の名前がエルヒー・メルゲンではないもの、あるいはエルヒー・メルゲンよりもタルバガンがなぜ4本指になったかという太陽には無関係のタルバガンの物語として流布しているものなど様ではない。そこで、次に、これらエルヒー・メルゲンのヴァリエントを紹介し、ここで取り上げた話との関係を検討したい。

2-2. エルヒー・メルゲンのヴァリエントの考察

本稿では、エルヒー・メルゲン——以下 EM と略す——の事例を本稿の末尾の資料1～7の資料に基づいて考察を進めるので適宜参照されたい。資料1にはツェレンソドノムの編集した3話(Цэрэнсодном 1989: 47-49)、資料2には『モンゴル民話』の3話(Монгол Ардын Үлгэр 1982: 28-30)、資料3には、ロシアのポターニンの採取した6話(Потанин, Г. Н. 1883: 179-180)、資料4には、『ブリヤート民話』(Сказки Бурят Монголии 1997: 101, 117)の1話、資料5にはブリヤートから記録されたルカーシキンの1話(ルカーシキン(補遺) 1937: 1-3)、資料6にはモンゴルの伝説研究者である Namjil の挙げる6話(Namjil 2001: 243-249)、最後の資料7には北モンゴルからラムステッドの採集した話(Ramstedt 1974: 162-163)を挙げる。

なお、このうち資料1と資料2、それから資料6の第1話は同一資料であり、またこの物語は前節で取り上げた物語であるので、末尾での訳は省略してある。資料間で重複している話と、モンゴル人以外の語り手が語ったポターニンの2話を差し引くと、計16話存在している。末尾の資料においては、これらの16話にそれぞれの資料における番号の右横に()をつけて(1)～(16)の通し番号をつけておいた。以下の議論においては、この通し番号を採用することにしたい。

表1は、これら16話を、主人公名、射撃の対象、親指を切る行為者(主人公以外の場合には親指を切らせる行為者)、誓約、ツバメ、馬、アラグダーガについて、言及があるかな

表1：エルヒー・メルゲンの16ヴァリアントの相互比較

	主人公名	射撃の対象	親指を切る行為者 (主人公以外の場合は親指を切らせる行為者)	誓約	ツバメ	馬	アラグ ダーガ
(1)	エルヒー・メルゲン	7つの太陽	主人公自身	○	○	○	○
(2)	エルヒー・メルゲン	3つの太陽と 3つの月	ボルハン・バクシ	○	×	×	×
(3)	エルヒー・メルゲン	昴の7つの星	主人公自身	○	×	×	×
(4)	タルバガンの前世で ある獵師	人間	ボルハン・バクシ	×	×	×	×
(5)	女の子	(領民の子供)	王(王がタルバガンの 指を切る)	×	×	×	×
(6)	タルバガンの前世で ある獵師	テルゲネ(鳥)	主人公自身	×	○ただし テルゲネ	×	×
(7)	タルバガンの前世で ある獵師	3つの太陽	主人公自身	×	×	×	×
(8)	タルバガンの前世で ある獵師	4つの太陽	ボルハン・バクシ	×	×	×	×
(9)	タルバガン・メルゲ ン	ツバメ	主人公自身	○	○	○	○
(10)	エルヒー・メルゲン	7つの太陽 (6、7つの 太陽とも)	主人公自身	○	○	○	×
(11)	タルバガンという名 の若者	ツバメ	仏陀	×	○	×	×
(12)	エルヒー・メルゲン 王	8つの太陽	ボルハン・バクシ	○	×	×	×
(13)	タルバガ・メルゲン	3つの太陽	ホルモスタ・テング リ(デルヒーン・ ツァーガン・アーウ の関与有り)	○	×	×	×
(14)	兄弟7人の末弟であ るメルゲン・ハル ワーチ	太陽と月	主人公自身	○	×	×	×
(15)	ウネンという若者	12個の太陽	タルバガには関係な し(ホルモスタ・テング リが主人公を殺害する)	×	×	×	×
(16)	エルヒー・メルゲン	3つの太陽	ボルハン(ただし指 を切るモチーフはなし)	×	×	×	×

いかなの観点で比較したものである。有無は○と×で示してある。

これら16話のうち(1)が最も完成度の高い物語であると考えられるので⁸、以下におい

ては(1)を基本にしてそれぞれの物語がどのような関係にあるのかを考察していくことにする。それゆえ以下の考察のなかでは、(1)を基本話と呼ぶことにする。結論を先取りすると、以下の考察を図示すると図3のようになるので適宜参照されたい。

まず、基本話が七冲を表示することを主眼にしていることを考えれば、太陽の数は7でなければならないことになる。(10)は、冒頭の部分で太陽の数を「6、7」としているような曖昧さがあるとはいえ、物語内容から見て明らかに基本話に最も近い物語であるといえる。ただし、基本話と比べると、最後に馬がアラグダーガ(跳兎)に変身するという叙述がないので、基本話の2組の七冲のうち1つしか描かれていないことになる。

(9)は、射撃の対象が太陽ではなく、ツバメになっている点や主人公の名前がタルバガン・メルゲンという点では基本話とは異なるものの、基本話におけるツバメ、馬、アラグダーガのすべてが揃っている点、またその変身のあり方がすべて一致しており、これもまた基本話に近い物語と考えることができる。射撃の対象や主人公の名前といったことは、EMの物語にとって一見非常に重要にみえるが、実際のところ、あまり重要視してはならないということをこの事例は示している。

(9)における射撃の対象が必ずしも太陽に関係していなくても基本話につながるということを受け入れることができれば、射撃の対象が昴という7つの星になっている(3)もまた基本話につながる話になる。ただし、この(3)にはツバメや馬やアラグダーガは現われていないという点で、基本話からかなり隔たってしまっているといえるだろう。

(9)の昴が基本話と同じグループに入るということであれば、(14)もまた同じグループに入れることができる。ここでは、兄弟7人のうち6人が昴になるという叙述がある上に、末弟であるメルゲン・ハルワーチ(「巧みな射者」の意)がちょうど基本話のエルヒー・メルゲンの役割を担っているからである。「7」という数字を兄弟の数に用いたため、

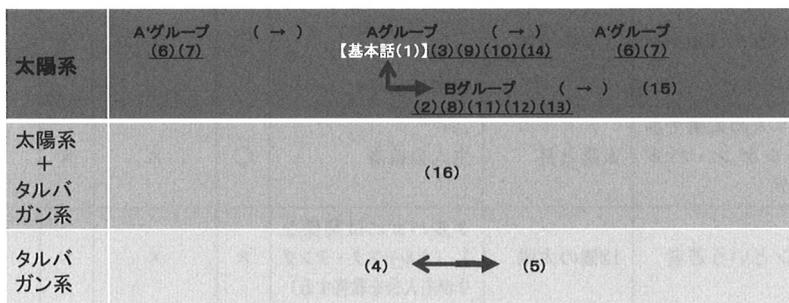


図3：16のヴァリエーション間の伝承関係

- ①↔は対抗言説関係にあり、左から右に伝承が生成した可能性を示す。
- ②(→)は左から右に生成した可能性はあるが、そうでない可能性もあることを示す。
- ③(4)はAグループより以降に形成されたとみられる。
- ④(7)は(8)より前に形成されたとみられる。
- ⑤太陽系のBグループとタルバガン系の先後語関係は不明である。
- ⑥(15)はEM話群の枠組みに入らない可能性もある。

ここでは射撃の対象である太陽の数がひとつになった可能性がある。また、ここでは太陽のほかに月も射撃の対象となっている。(9)と同様に、ここでもツバメやウマやアラグダーガは現われない。

(3)と(14)には昴に言及されており、昴が、星の数を6つとも7つとも数えられている星座であり、肉眼では6つと数えられることが多いことが物語に利用されているといえる。ただし(14)の昴の話は、(3)の昴の7つの星の話とは異なっている。(14)では昴の6つの星は主人公であるメルゲン・ハルワーチの話と直接連絡していないので、どうやら、(14)は基本話のEMの話と昴の話が接合した物語の可能性がある。つまり、昴の話にも幾つかヴァリエントがあって、それらが別々にエルヒー・メルゲンの話と接触したものと考えられる。(3)の昴の話の場合、ギリシャ神話に連絡するようなモチーフが存在している⁹。本稿では対象とはしないが、ギリシャ神話との関連は今後検討されるべき課題である。

以上挙げた(3)(9)(10)(14)が、基本話と同じグループに入ると考えられるので、これらをAグループとしておく。Aグループは七沖の「7」という数字を重視してまとめたグループである。基本話をいれて、16話のうち5話という3分の1がこのAグループに属することになる。

これ以外の物語の考察の手掛かりとして、物語内容が非常に似ている(7)と(8)を対比して考えてみたい。両者の違いは、表1から明らかなように、2点に求められる。ひとつは、(7)では射撃の対象である太陽が3つであるのに対して、(8)では4つというように太陽の個数が異なることである。もうひとつは、(7)ではタルバガンに変身することを(7)では主人公が決めるのに対して、(8)ではボルハン・バクシ(仏陀)が決めていることである。太陽の個数に関しては、太陽の個数が1つであった(14)でも基本話と同じAグループに入ることを考慮に入れると、太陽が3つか4つかという点に、あまり大きな違いを認めることはできないであろう。

もうひとつの、主人公がタルバガンになるのを決めるのが主人公自身かボルハン・バクシかという点を表1で確認すると、物語内容を基本話と根本的に異にする(5)と(15)以外は、主人公が決めるパターンと、ボルハン・バクシ(仏陀)やそれに順ずるホルモスタ・テングリ(帝釈天)が決めるパターンの2通りに分かれていることが判明する。つまり、主人公かボルハン・バクシかという二者択一であって、タルバガンになることを決める点において多様性はないことがわかる。この点をかんがみると、この違いは考察に値することであることが理解される。そこで、ボルハン・バクシの物語における役割を考えてみる。

主人公をタルバガンにすることを決定するのがボルハン・バクシであるのは、(2)、(4)、(8)、(11)、(12)、(13)、(16)の7話である。

(2)では、ボルハン・バクシは太陽と月の手前に鈴と金剛を置いて主人公が射抜かないように座っている。(4)においては、人間を食料にしているタルバガンをボルハン・バク

シが人間のために罰して指を切って現在のような穴倉に暮らす動物にしたと物語る。(8)においては、ボルハン・バクシは主人公の獵師が4つの太陽を全部射抜いてしまうと地上に光がなくなると怖れて獵師をタルバガンにしたとしている。(11)においては、神聖な鳥であるツバメを射たのでボルハン・バクシが主人公を処罰してタルバガンに変えたとある。(12)では、8つの太陽を次々に射抜く主人公が最後の太陽を射抜くのではないかとボルハン・バクシが慌てて托鉢の器で太陽を遮ったとしている。(13)においては、デルヒーン・ツァガン・アーウ(世界の白い父)が3つの太陽のうち2つを射抜いた主人公が最後に残った太陽を射落としてしまえば世の中の生き物がどうやって暮らしていけるかと言って、杖を天に突き刺して主人公の矢を遮ったとしている。ここでデルヒーン・ツァガン・アーウ(世界の白い父)というのは、ツァガン・ウブゲン(白い老人)と呼ばれる仏教パンテオンに入ったモンゴルの土着的神格に名前が似ているので、それに連なる神格としてここでは扱っておく。

最後の(16)は、厳密に言えば、ボルハン・バクシが主人公をタルバガンにしたとは語っていない。しかし、ボルハン・バクシは主人公が3つの太陽の2つを射落とした最後の太陽を射落とそうとしたときに袈裟を空中に引っ掛けて太陽を守っており、この趣向は鈴や金剛、托鉢の器、杖を用いて太陽を守る(2)、(12)、(13)と共通しており、同じグループに入れてもよいものとおもわれる。

以上の7例のうち、(2)、(8)、(12)、(13)、(16)の5例は、ボルハン・バクシ(やそれに類する神格)は、「1つの太陽を守る者」として登場している点で共通している。(4)には太陽が登場していないものの、ボルハン・バクシは人間を救うために主人公をタルバガンにしている点で、「残った1つの太陽を守る者」に連なる話といえる。(11)の場合は、神聖なツバメを害そうとしたという理由でボルハン・バクシが主人公をタルバガンに変えたとしており異なっている。しかし、よく考えれば、(11)のツバメは「太陽を遮った」という点で「太陽を守る者」の役割を付されているともいえる。つまり、ツバメはボルハン・バクシの役割の変形と考えることができる。

以上により、ボルハン・バクシが主人公をタルバガンにする一連の物語におけるボルハン・バクシの役割は、「残った1つの太陽を守る者」ということになる。この考察で注意すべきことと思われるのは、ボルハン・バクシではなく、主人公が自らタルバガンに変身するその他の物語においても、最終的に主人公は最後の太陽を射抜くことに「自ら失敗する」ので、ボルハン・バクシの介入がなくとも、太陽はひとつ残されていることである。つまり、EMの物語には「残ったひとつの太陽を守る者」は必要ないのである。にもかかわらず、「残ったひとつの太陽を守る者」としてボルハン・バクシが登場する。

ボルハン・バクシのこの「残ったひとつの太陽を守る者」としての役割は、主人公がタルバガンになることを自ら決める物語においての主人公の役割はどうかという点に注意を向けさせる。ボルハン・バクシの登場しない物語には、主人公には太陽を射落とす役

割はもちろんあるものの、実は、「失敗」という結果によって、太陽をひとつ残す役割も同時に存在することが判明する。太陽が残ることが主人公の失敗という結果によるものであるためにこのことは見えにくくなっているが、ボルハン・バクシの登場する話群によってむしろ明るみに出てくることは興味深い。このように考えると、主人公がタルバガンになることを決定するのが、主人公その人であるのか、それともボルハン・バクシかという相違は、太陽を1つ残した功績を主人公に帰するか、ボルハン・バクシに帰するかという相違ということになる。

前述のように、最終的に主人公は最後の太陽を射抜くことに「自ら失敗する」ので、ボルハン・バクシの介入がなくとも、太陽はひとつ残される。それゆえ、EMの物語にはボルハン・バクシの存在は基本的に必要がない。基本話においても、EMは自ら失敗してタルバガンに変身しており、ここにボルハン・バクシの介入は全く必要ないため、登場していないというべきである。基本話と同じグループに入るAグループの他の(3)、(9)、(10)、(14)はすべて主人公自らがタルバガンになることを決定している。ここからみると、ボルハン・バクシが主人公をタルバガンにする物語はAグループよりも後に、対抗言説として形成されたと推測できる。

考察の対象を(7)と(8)の対比にもどそう。物語内容として非常に類似している(7)と(8)をみると、(7)では主人公自身が、(8)ではボルハン・バクシがそれぞれタルバガンになることについて決定している。以上の考察からみると、両者はちょうど対抗言説のせめぎあいを示しているとみなしうる。この場合、論理的には主人公自身がタルバガンになっている(7)のほうが(8)より古いということになる。(7)には、太陽の数が7つではなく3つであり、また、ツバメも馬もアラグダーガも登場せず、さらに多くの物語で登場する主人公の誓約もないというように、基本話とはかなり異なる。物語内容も単純であり、「太陽を射抜くことに失敗して自らタルバガンになる」という点でのみ基本話と共通している。しかし、この共通点は、(7)をAグループにつながる話と位置づけることを許すであろう。とはいえ、その余りに単純な内容ゆえ、広義にAグループに属するといわざるをえない。

この(7)に似ているのが、射撃対象の違いはあるものの、(6)である。(6)では、射撃の対象がテルゲネという鳥であり、太陽を射る話である(7)とは異なっている。だが、射撃の対象の違いはさほど大きな問題にはならない。なぜなら、前述のようにAグループに属する(9)もまた射撃対象が鳥であるにもかかわらず、その他の点では最も基本話に近いからである。それゆえ、(6)のテルゲネという鳥はツバメと同じ役割を果たしているといえる。したがって、(6)はAグループに連なる話といえよう。ただし、(7)と同様に、その話の単純さをみると、(6)もまた、「広義に」Aグループに連なる話と理解する必要がある。

それでは、(6)や(7)を広義にAグループに連なる話だとして、Aグループの形成の

前なのか後なのか。これについては、その内容的な単純さから、可能性としてはどちらもあるといえる。つまり、グループ A の話群の未熟な話でもありうるし、A グループが形成された後に忘却による物語の衰退によってできた話でもありうる。これについては、判断ができない。以下の、記述においては、(6) と (7) を A' グループと呼ぶことにしたい。

ツバメが射撃の対象として登場する事例としては、今述べた (6) や (9) のほかに、(11) がある。ここでは、表 1 のように、仏陀が登場して、主人公をタルバガンに変えているので、前述の議論で明らかになったように、(11) を A グループに入れることはできない。すなわち、A グループよりも新しく形成された話となる。

整理しよう。A グループとの関係で、ボルハン・バクシ (とそれに順ずる神格) が太陽を守る (2)、(8)、(12)、(13) は同じグループに入れることができる。補足すべきことは、(13) の場合、デルヒーン・ツァガン・アーウ (世界の白い父) が太陽を守って、ホルモスタ・テングリ (帝釈天) が主人公の指を切り落とすという変則的な内容となっていることである。しかし、ボルハン・バクシが太陽を積極的に守る者として登場している点で (12) と類似しているので、(12) と同じグループに入れることができるであろう。そして、この同じグループには、前述の、射撃の対象が太陽ではなくツバメになっている (11) も入れることができる。(16) の場合、前述では、ボルハンが主人公をタルバガンにする話に準じるとしたものの、物語の前半と後半のつながりに無理があり、単純に (16) を同じグループに入れることはしないでおく。この (16) については後で詳述することにしたい。以上により、(2)、(8)、(11)、(12)、(13) のグループを A グループに対抗して創られた B グループと呼んでおく。

以上の考察を整理すると、A グループには基本話を含む (3)、(9)、(10)、(14) の 5 話、B グループには、(2)、(8)、(11)、(12)、(13) の 5 話が入る。そして、(6) と (7) は A グループにつらなる話すなわち A' グループだが、B グループよりも先に形成されてはいるが、A グループよりも後にできたか先にできたかを判定することはできない (図 3 参照)。

以上においてグループ化されていない話は、(4)、(5)、(15) そして (16) であり、以下においてはこれらを (15)、(4)、(5)、そして (16) の順で考察を進めていきたい。

(15) では、12の太陽を射撃する話であり、一見、EM 話群に入れているものの、この話は16話のうち唯一タルバガンに無関係な話となっている。話群に入っている理由は、(15) が太陽を射撃するというモチーフがあり、基本話で登場する太陽を射するというモチーフを重視したためである。とはいえ、この (15) は他の話とは異なり、ここでひとつの太陽を残すのは、ウネンと呼ばれている主人公であり、このウネンは A グループの「失敗によって意図しない結果として太陽をひとつ残す主人公」とは異なり、「私を残さなければこの世は常に真っ暗闇になります」という太陽の命乞いをきいて、失敗によるのではなく、意図的に太陽をひとつ残している。この点で、A グループとはかなり異なる意匠となっている。「ひとつの太陽を守る者」は、主人公であるウネンである。ウネンはタルバガンに変

身することはなく、一貫して人間として描かれている。しかも、ここでは12個の太陽を昇らせて人間に害をまいたのはホルモスタ・テングリ（帝釈天）となっており、Bグループの太陽を守る者としての仏教的神格の性格をホルモスタ・テングリは担っておらず、ホルモスタ・テングリは明らかに人間に敵対するマイナスの役割を背負わされていることが観察される。人間に害を与えるのが、ボルハン・バクシではなく、格下のホルモスタ・テングリである点で多少弱められているが、ここには仏教に対するある種の不信感があらわれているように思われる。それゆえ、(15)は仏教の権威を主張したBグループよりも後に出現した話ではないかと推測する。とはいえ、この(15)はタルバガンに何も関係のない話であるので、そもそもAグループやBグループとの関連で議論することが妥当であるかどうかは実際のところ判断しかねるところである（図3の⑥参照）。

次に(4)であるが、(4)は(5)とセットで論じるのが相応しいと考える。(5)は、一連の話と全く異質な話に見えるので、この物語こそ(15)以上にEM話群に入らないように見えるのであるが、じつは、(4)とセットにして論じることによって、EM話群との関連を見出すことができる。一見したところ、(4)のほうは、ボルハン・バクシが主人公をタルバガンに変えている点で、前述のようにBグループに連なる話である。しかし(4)は射撃の対象を「人間」としており、この点に大きな違いを認める必要があるようにおもわれる。

(4)の話においては、タルバガンはかつて人間を食べていたので、それをボルハン・バクシがとがめ、タルバガンを人間の狩りの対象に変えたとしている。つまり、かつて人間を食べていたので、今度は食べられる存在になったと因果応報的に語っている。この物語の因果応報的な物語展開をみれば、人間は、タルバガンを食べることを控えなければならないということが論理的に帰結される。つまり、ここには、現実の生活世界における狩りという行為に対する否定的態度がうかがわれる。このことは、タルバガンが物語の中心にあることに関連して登場してきた、狩りという行為に対する是非と関係している。

(4)が成立するための条件を考えてみる。ボルハン・バクシが、以前は人間を狩っていたタルバガンを今度は人間に狩られる動物にしている点に注目すると、Bグループのような「太陽を守る者」としての意義は認められないが、いわば「動物界の秩序を守る者」といえる役割をボルハン・バクシが担っているといえる。こうした話が流通するためには、まずはボルハン・バクシの権威が確立していなければならないことは明らかであろう。それゆえ、この話は、太陽をひとつ守るという役割を主人公である狩人から奪ってボルハン・バクシに移したBグループよりも新しいということになる。とはいえ、逆の可能性もある。というのは、次のような事情を考慮する必要があるからである。

基本話においては、積極的に主張しているわけではないものの、主人公は「太陽を狩る」ことに失敗して、逆に、最終的に人間に狩られる動物タルバガンになったことが示されている。とすると、ここにはタルバガン狩りを肯定する態度が含意されていることになる。

太陽を守る者としての役割を狩人かボルハン・バクシのどちらに付すかについて A グループに対する対抗言説として出てきたのが B グループであったが、この B グループとも異なる、狩りを肯定するか否かについての視点で物語を主題化させたのが (4) といえる。

前述のように、一見、B グループにおけるボルハン・バクシの権威付けは、(4) の内容におけるボルハン・バクシの種の操作——人間を狩っていたタルバガン人間に狩られるタルバガンにするといった操作——の前提として必要であるので、B グループは (4) よりも先に形成されていなければならないように考えられる。しかし、太陽を守ったのは誰かというような視点は抽象的であるが、タルバガン狩りの是非という視点は生活世界においては現実的な問題であろう。それゆえ、タルバガン狩りの是非についての話がさきに A グループの後に形成された可能性は低くないと考える。そして、さきに (4) が作られた後、(4) が成立するための条件としてのボルハン・バクシの権威付け (すなわち B グループ) が後から辻褄あわせとして作られた可能性があるのである。とくに、B グループの話群は、A グループの細部を変えるだけで創ることができることは見逃せない。これに対して、(4) はタルバガンの描写——「黒水をのまず、老いた草を飲まず……親指を切り落とします」という箇所——については A グループを借用しているが、物語の内容はよりオリジナルなものとなっている。

以上から、この (4) は A グループよりも後に作られたということが推測されるだけで、B グループとの先後関係を決定することは難しい (図3の③参照)。ここで注目すべきことは、EM 話群は、太陽に関わる「射日神話」として議論されることが多いのであるが、「タルバガン」という動物に常に関わっていることで、「狩り」という文脈が関与してくることである。まさにこの点で、モンゴルの EM 話群は、他の地域の射日神話とは異なる、モンゴル独特の物語群を形成しているということが指摘されるべきである。このことは、次に論じる (5) の考察を通じて、さらに強調されるべきことのように思われる¹⁰。

(5) は、その他の話とは全く趣を異にする内容となっている。ここでは、太陽も鳥も現われないどころか、そもそも主人公が狩人ではないので、射撃の対象が存在しない。唯一、EM 話群につなぎとめられている理由は、この話がなぜタルバガンの指は4本になったのかというモチーフが登場している点にある。主人公は、王様の悪政に苦しむ領民の子供 (女の子) である。ここでは、醜い顔をもつ息子をもつ王様が、息子を恥じて領民に隠しつつ暮らしている。原文には直接触れられていないが、王様は息子が誰ともコミュニケーションをもつことがないことを心配したのであろう。領民の子供たちを一人ひとり息子のもとに遣わして世話をさせる。しかし、世話をさせた子供たちを帰らせると息子の醜さが暴露されてしまうので、王様はその心配を断ち切るために世話をさせた領民の子供たちを次々に殺害していた。

あるとき、主人公である娘に順番が回ってきて、王様の息子の世話に行く。しかし、この娘の母親は事前に自分の母乳でつくったチーズを娘にもたせ、このチーズが娘の命を救

う。このチーズに味をしめた王様の息子はもう一度このチーズを味わうために娘を実家に帰らせる。そのさいに、自分の顔の醜さを誰にも言わないように、もし言いたくなったらタルバガンの穴に言うように約束させる。娘はしばらく約束を守っていたが、ついにこらえきれなくなって、王様の息子の秘密をタルバガンの穴に叫んでしまう。この叫び声を近隣の領民がすべて聞いて知ってしまった。それ以降、領民たちは自分の子供たちを王様のもとに遣わすのをやめる。怒った王様は息子の秘密を漏らした犯人を追跡し、その犯人がタルバガンであることを突き止め、タルバガンの指を切り落とす。

この話は、明らかにギリシャ神話の「ミダス王の耳」についての話を取り込んで作られたものであることがわかるが¹¹、AグループやBグループとの関係でみると、「王」という新たな権威者が登場していることに注目できる。ただし、この王はやや揶揄された形で描写されていることには注意が要されよう。

物語を表面的によめば、タルバガンという動物は、何の落ち度もなく濡れ衣を着せられて王によって指を切られるという点で気の毒な存在といわざるをえない。しかし、因果応報的に考えるのであれば、王や王の息子に何の咎めもないということは不思議なことといえる。そのように考えるとき、タルバガンというのは実は王の息子を象徴的に指した隠喩ではないかという考えが生じる。このことは、タルバガンが前世においては人間であったという叙述がはっきりと見える(4)、(6)、(7)、(8)、を参照にすると奇異ではなからう。

タルバガン＝王の息子と考える場合、タルバガンが親指を切られるのは、まさに因果応報であり、王は自分の息子の指を切って話が完結することになる。この場合、王の息子が、娘に自分の秘密をタルバガンの穴にだけ言っていていいというのも納得できる。これは王の息子がまさにタルバガンそのものである自分自身に言ってもいいということになるからである。また、王の息子を魅了した娘のチーズが、母乳でつくられており、この王の息子がこのような味のチーズを食べたことがないと言っているところを見ると、このことは王の息子が人間の母乳を知らないことを暗示している。すなわち、このことは、王のこの息子をタルバガンという動物として解釈してもよいことを暗示するものでもあろう。

ここで重要なことと思われるのは、(5)ではタルバガン＝王の息子と解釈することもできるが、しなくてもよいという、「解釈の余地」があるということである。つまり、タルバガンの指を切る王の処罰が正しいと思う人は、タルバガンを王の息子と見立てる必要が全くないのである。この場合は、王が世の中の秩序を立てる権威者として存在することになる。反対に、王のタルバガンに対するこの処置を不当とみなす人は、因果応報の観点からタルバガンを王の息子であるという見立てをするのである。この場合は、王の権威を否定することになる。つまり、この物語は聞き手あるいは読者に一方的な解釈を押し付けているわけではなく、「解釈の余地」を残している。

「解釈の余地」を残しているとはいえ、「狩り」という視点から見ると、タルバガンを王の息子と見立てようと見立てまいと、どちらもタルバガン狩りを肯定する内容となってい

ることは重要である。つまり、(5)は(4)での狩りに対する否定的態度とは反対の、狩りに対する肯定的態度を「解釈の余地」を与えつつ提示している。

「解釈の余地」を与えるようなこうした独特の技法は、モンゴルの各種の伝承にみられる(藤井2003b)¹²。(5)は、一見したところ、いわゆる「民話」と呼ばれるジャンルとして把握される体裁をとっているが、実際のところ、こうした「解釈の余地」を与える「二重の意味構造」をもつ伝承の系譜につらなることを示唆している。とくに、「狩り」という視点でいえば、(5)と関連する議論として、『アルタイ讃歌説話』についてかつて論じたことのある「二重の意味構造」論を想起せざるをえない(藤井 2003b : 203-230)。

モンゴル国において英雄叙事詩の名高い伝承者を輩出した集団に、アルタイ・ウリヤンハイ集団があるが、『アルタイ讃歌説話』はこの集団に伝承されている話である。この集団においては、英雄叙事詩を語る前座として、アルタイ山脈の動植物を賛美する『アルタイ讃歌』と呼ばれる語りを語る¹³。当該集団の英雄叙事詩を語る作法として、この『アルタイ讃歌』を語ることは必須のことであり、必ず守らなければならないこととされている。『アルタイ讃歌説話』というのは、この『アルタイ讃歌』に付随して語られる「狩り」に関わる説話である。この説話は「二重の意味構造」をもっており、同時に、この「二重の意味構造」について「解釈の余地」を与えている。(5)の解釈との関連で重要だと思われるのは、ひとつには、『アルタイ讃歌説話』における主人公は獵師であるが、この獵師は英雄叙事詩の語り手である点である。もうひとつには、『アルタイ讃歌説話』の非明示的な意味が、英雄叙事詩の隠された秘密を口外しないようにさせる意図をもっていることである (ibid)。

つまり、「狩り」の文脈で考えた場合、(5)の作者は、狩人であり、かつ英雄叙事詩の語り手というような属性を持っていた人ではないかと想像されるのである。つまり、狩りという行為を殺生の禁止という仏教的な見地からみられては困る人物であり、かつそれを隠喩的に物語ることのできる語りの技術をもっていた人物ではないかということである。AグループやBグループのような話においてはタルバガン狩りが許容されるので、(5)はこれらのグループとは直接関係がないことが推測される。この点、(4)はまさに狩りを禁ずる内容となっているので、(5)は(4)に対する対抗言説的に創られた物語という可能性が高いのではないかと考える。

そのように考えると、(5)を創ったのが狩人で、かつ英雄叙事詩の語り手であるという見方は、ひるがえって(4)において登場する「弓矢を持った3歳の子供」の意味を理解するのに役立つ。すなわち、(4)には、人間がタルバガンを狩りに穴倉を追跡していくと、タルバガンがその穴の隅で弓矢を持った3歳の子供になって座っていたという叙述がある。この場合、なぜこうした形象でタルバガンが描写されるのかについては、この叙述だけでは理解することはむずかしい。しかし、モンゴルの英雄叙事詩において、勇者は「3歳」で象徴的に成人することが多いことを考慮に入れるならば、この「弓矢を持った3歳の子

供」を英雄叙事詩に登場するような「勇者」として解釈する道が拓けるのである。本稿で論じる『ジャンガル』においてもジャンガルは「3歳」からその活躍を開始していることが観察される。

こうして、一見、英雄叙事詩とはまったく無関係に見えていた(4)にも英雄叙事詩の痕跡を認めることができるようになる。また、前述のように、(5)は一見したところ、いわゆる「民話」にジャンル分けされているものであるが、実際には、「二重の意味構造」をもつ点で英雄叙事詩に典型的に見られる伝承構造をもっているのも、こちらもまた変則的な英雄叙事詩と考えてよいであろう。ここで興味深いことは、この(5)についてはどのような人物から記録したのか不明だが、(4)はモンゴル国のホブド県ドート村の牧民で英雄叙事詩の語り手であるスヒーン・チョイスレンの語ったものだという事実である。チョイスレンはモンゴル国でも英雄叙事詩が盛んであったアルタイ・ウリヤンハイ集団の出身であり、(4)に英雄叙事詩の痕跡が認められるのも納得できる。(5)が(4)に対抗して創られたものであるとすると、(5)もまた英雄叙事詩の影響を受けていることはもちろん、英雄叙事詩の語り手が創った可能性が高いということになる。

いずれにせよ、表面的には全くことなる(4)と(5)の2つの話であるが、以上の考察から、(4)の対抗言説として(5)が形成されたことが推測される(図3参照)。

ところで、(5)は、基本話から遠く隔たっているようにみえるが、実は、基本話と通じる易学的知識が埋め込まれていることに注意を喚起しておきたい。この話において王の息子の醜悪さを主人公の女の子は「王様の息子はとても醜い。牛のような角が生えていて、野生の猪のような歯をしているわ」と表現している。牛は丑、野生の猪は亥に対応し、もし、この王様の息子自身をタルバガンと見立てるならば、これは子に対応するので、亥-子-丑の「北の方合」が完成するのである¹⁴。このように考えると、(5)は一見したところ基本話からかなりはずれているように見えるがそうではないことが理解される。以上の(1)~(15)の考察により、EM話群には太陽を射るモチーフ(とそれに準ずるモチーフ)の認められるA、A'、Bというグループと、そのモチーフがない(4)と(5)のグループがあることが判明する。前者を「太陽系」、後者を「タルバガン系」と仮に呼んでおくことにしたい。ただし、「太陽系」の話にもタルバガン系が組み込まれていることを指摘しておかねばならない。

最後の(16)の考察に移ろう。前述のように、この話はボルハンが最後に残った太陽を守る点でBグループに連なるとした。だが、この話はそう単純ではない。というのは、この(16)は前半部では、エルヒー・メルゲンが3つの太陽を全部射ることができなかったためにタルバガンに変身し、その結果人間の食料になったと述べるのに、後半部においては、タルバガンを人間が射ると、その射った人自身がタルバガンとなるので、タルバガンを射ってはいけないと説明しているからである。つまり、前半部ではタルバガン狩りを肯定しており、後半部では前半部との連絡なくいきなりタルバガン狩りを否定する内容となっ

ている。とはいえ、後半部では、タルバガンの肉で食べていい部位とそうではない部位があることにも言及しており、必ずしもタルバガン狩りを否定しているわけでもない。前述のように、(4)はタルバガン狩りを否定する内容のものであるにもかかわらず、(16)のようにタルバガンに人間の食べてよいとそうでない部位があると語っており、その点でこの(16)と共通している。

ここで指摘すべきことは、(16)では太陽を射る前半のモチーフが後半部に直接に関連していないことが観察されることである。つまり、この話は二つの話が接合してできた可能性がある。前半部は、太陽を射るモチーフがある太陽系の話であり、後半部は、タルバガン系の話ではないかということである。それゆえ、(16)は、太陽系とタルバガン系の結合した話となっているといえる(図3参照)。

以上、16話の考察で判明した伝承の生成関係を図示すると、図3のようになる。図3で明らかのように、モンゴルのEM話群は、「タルバガン」という動物との関連で物語が構成されていることが特徴である¹⁵。そして、太陽を射ることを中心に話が展開している太陽系の物語群以外に、タルバガン狩りの是非に焦点を当てたタルバガン系の話があること、そしてこの2つの伝承の接合系があることが確認される。いずれにせよ、基本話の分析から、他の15話を理解することがある程度可能であることが示されたといえる。

以上は、モンゴル人の住む地域に伝承されているEM話群を対象にした、モンゴルの内的な言説的發展という視座からの考察である。補足すべきことは、たとえば、資料3における[2.]や[6.]のテレンギトにおいてもタルバガンの登場するEM話群のなかで考察すべきとおもわれる話が存在しているということである。今後は、こうしたテレンギトをも含むような狩猟をおこなう地域や集団におけるEM話群との関連でも考察を深める必要がある。以上に述べた、モンゴル内部の伝承と外部の伝承との比較、このふたつが整合的に説明されるとき、EM話群の伝承の全体像が構築されることになるう。

3. エルヒー・メルゲン話群から『ジャンガル』へ

3-1. フンド・ガルタイ・サワルの解釈への応用

本稿の目的は、1.で述べたように、ジャンガルがアル=ボンビーン=オロンの支配権を確立した“7歳”の7という数詞が易学において七冲と呼ばれる概念と関係するのではないかという仮説を提起することである。ホンゴルとアルタン・チェージの関係が七冲関係として受け入れられるものだとすると、ホンゴルは東の卯に、アルタン・チェージは西の酉の位置にそれぞれ対応し、ホンゴルの卯から数えて、アルタン・チェージの酉はちょうど7番目に当たることになる(図1参照)。

EM話群の基本話と『ジャンガル』が関連する機縁と考えられるのは、EM話群の基本話で織り込まれているタルバガンの指に関するモチーフと七冲の概念の二つを基本的に取り入れると、エーリヤン・オブランの序におけるフンド・ガルタイ・サワル Хүнд гартай

савар という勇者の名前をアルタン・チェージとの関連で読み解くことができるようになる点に求められる。フンド・ガルタイ・サワルは、『ジャンガル』においてしばしば登場する勇者で、エーリャン・オブランの序においては、右側の第1席に位置するアルタン・チェージの次席に座っている勇者である。

フンド・ガルタイ・サワルの名前を直訳すると「重い・腕をもった・サワル」であり、多くの研究者が、「腕っ節の強いサワルという勇者」と理解している。「サワル」は実は「四肢」と訳出できるものの、固有名詞として扱われている¹⁶。しかし、EM 話群の基本話を応用すると、「サワル」は「四肢」と理解してよいのではないかということが言えそうなのである。また、この「サワル」を修飾語している語句と考えられている「重い・腕をもった」を、「腕っ節の強い」という転義で最初から考える必要はなく、まさに字義通り理解してよい可能性が出てくるのである。以下、これについて述べる。なお、以下の考察においては図4を参照にされたい。

まず、議論の前提として言及しておく必要があると思われるのは、次のようなことである。七冲関係で配置すると、ホンゴルは東の「卯」に、アルタン・チェージは西の「酉」にそれぞれ対応する。しかし、この二人の勇者の名前そのものについて、EM 話群や七冲の考察からヒントを得ることはできない。ホンゴルは、「明るい黄色の」や「親愛な」という意味であり¹⁷、これを「卯」に対応する兎の特徴として選択された語彙と同定することは難しい。また、アルタン・チェージの場合も同様である。アルタン・チェージを直訳すると「金の胸」という意味であるが、これも「酉」に対応する鳥の特徴として選択された語彙として同定することは難しい。

しかし、サワルがアルタン・チェージの次席に座っているとすると、図4のように「申」

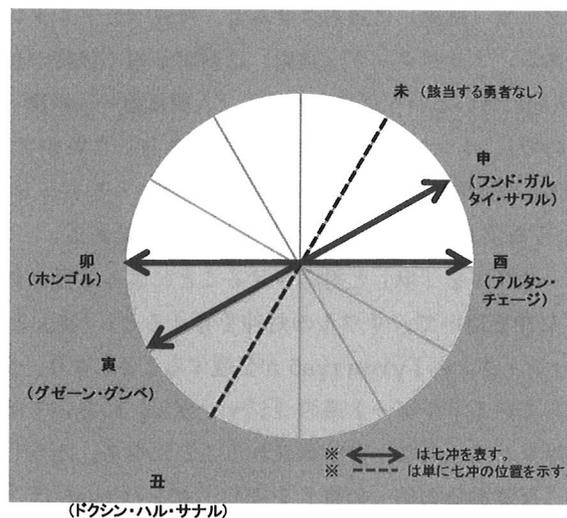


図4：『ジャンガル』における勇者間の七冲の可能性

の位置がサワルの座席となる。ここではじめて、ホンゴルやアルタン・チェージの場合には不可能であった、「フンド・ガルタイ・サワル」という勇者の名前を「申」を対応させる可能性が出てくるのである。つまり、「フンド・ガルタイ・サワル」すなわち「重い手を持った四肢」とは、「前脚が後脚よりも長い猿」のことを意味したのではないかということである。この推測は、EM 話群の基本話における次のような事実を考慮にいと、いっそう信憑性があるように思われる。

基本話において登場するタルバガンやアラグダーガ（跳兎）は、指を切ったり、前脚を切ったりして、当該動物に姿を変えている。すなわち、タルバガンの特徴を、5本指から1本切り取った4本の指に見出していたり、アラグダーガ（跳兎）の特徴を、前脚が後脚よりも短いところに見出していたりしていることが観察されるのである¹⁸。今述べた「猿」すなわち「申」に対応させた「フンド・ガルタイ・サワル」の場合は、前脚が後脚よりも長い点にその特徴を見出しているのではないかということである。

脚との関連で考えると、実は、アルタン・チェージの名前もまた鳥すなわち「酉」との関連で理解できる道が拓かれる。つまり、鳥は空を飛ぶ動物なので、「脚がない」というところに特徴があるといえる。そうすると、アルタン・チェージは「金の胸」という意味であるが、これは、伝承で頻出する表現「アルタン・チェージテイ、ムンゲン・ブグステイ алтан цэжтэй, мөнгөн бөгстэй」すなわち「金の上半身をもつ、銀の下半身をもつ」を否定なく想起させることになる。つまり、アルタン・チェージが「金の胸」と表現される背景には、逆に彼には「銀の下半身がない」ということを暗示している。「脚がない」と「銀の下半身がないこと」とを同義に解するのである。

一方、ホンゴルの場合にはアルタン・チェージのようにはいかない。しかし、今述べたアルタン・チェージと関連付けることはできる。すなわち、ホンゴルの場合、EM 話群の基本話におけるアラグダーガ（跳兎）に該当させると、今述べたアルタン・チェージの解釈と符合してくるのである。アラグダーガ（跳兎）は前脚が短く後脚が長い動物である。この後脚が長いことは人間に近いという意味を表せる（人間は腕——前脚——ではなく脚——後脚——で歩行するので）。ホンゴルの位置は「卯」であり、これがアラグダーガ（跳兎）に対応し、七冲の「酉」の位置にある「脚のない」アルタン・チェージとの関係で言うと、「脚がある」というような反対の意味をになうことになるのである。

フンド・ガルタイ・サワルを「申」と対応させることによって得られるもうひとつの暗示がある。それは、七冲を用いて、サワルの対冲を考えると、「寅」となり、この席には左側の第2席のグゼーン・グンベ Гүзээн гүнбэが位置することになり、少なくともエーリヤン・オプランの伝承しているトルグート系の『ジャンガル』においては、サワルとグゼーン・グンベは密かに対立していることが暗示されることになる。ただし、グゼーン・グンベのグゼー гүзээは「反芻動物の第一の胃」を表し、グンベ гүнбэは「丸い」という意味である¹⁹。「寅」の脚については、「爪」に注目できるかと思われるが、これに該当する名

前ではないことは明らかである。グゼーは「腹」を意味するので、「寅」にひきつけば、脚が短く胴体が長いという特徴を考えることができるかもしれない。しかしこれはこじつけに過ぎるであろう。むしろ、フンド・ガルタイ・サワルの対冲であることを重視して、「前脚」ではないことを考える必要があろう。単純に「前脚」の逆を考えると「後脚」であるが、これはすでにホンゴルで用いてしまったので重複してしまう。重複ということでは新たに思い当たるのは、重複は回避されているのではないかということである。この場合、「前脚」と「後脚」は一度用いてしまうと重複になるが、「脚がない」には可能性があることがわかる。というのは、アルタン・チェージの場合、「脚がない」という比喻から間接的に「上半身」を意味する「胸」を作り出しているからである。そのような方向でグゼー・ブンベを考えてみた場合、フンド・ガルタイ・サワルの「前脚」の対冲として「後脚」ではなく「脚がない」を選択して、その結果「胸」と重複しない「腹」を選択したと考えることができる。

エーリヤン・オプランの席次に座っている勇者は全部で5人いるが、そのうち4人を取り上げたので、残る1人の勇者についても言及しておこう。この最後の勇者は、左側の座席の第3番目のドクシン・ハル・サナルである。この名前は「荒々しい黒い思い」という意である。この勇者は、「丑」の位置に座ることになるが、これまで論じてきた名前とはかなり異質な名前になっている。とはいえ、彼の対冲である「未」の位置に座る右の座席の勇者が欠落しているので、このドクシン・ハル・サナルを七冲という概念で論じることは妥当なのかどうか判断がつかない²⁰。それゆえ、なぜドクシン・ハル・サナルがこのような名前になったのかについては別に考察する必要がある。

ところで、「七冲」は、「敵対」や「対立」を意味する関係性であるので、ジャングルの勇者たちがこのように対立関係にあっては、『ジャングル』についてしばしば主張されるような同盟関係が崩れるのではないかという疑問が出てこよう。実際に、七冲は、前述のように、現実の生活世界における婚姻の縁組の是非を決めるさいに参照され、「伝統的」婚姻においてはこの七冲関係にある男女が結婚することが忌避されていた。とすれば、この疑問は看過できない問題であろう。ただし留意する必要があるのは、『ジャングル』の勇者間の七冲関係はあくまでも隠喩として存在しているのであって、明示的な勇者関係ではないことである。

とはいえ、明示的に示される勇者関係と関連づけて、この七冲関係にある隠された勇者関係を合わせて考えると、非常に興味深い『ジャングル』における“哲学”が垣間見られるようにおもわれる。なぜなら、この七冲関係はマイナスの関係であるが、こうしたマイナスの関係をプラスの関係にしようとする意図が働いているようにおもわれるからである。ここには、勇者たちがすべて男性であるからこそ可能になる、反目しあう力をむしろ合併させることによってジャングル陣営の力を倍増させようという心性が働いているのではないかとおもわれる。

ジャングルを中心とする同盟関係を崩すような勇者間の仲違いがアル=ボンビーン=オロンという守るべき故郷を喪失するという展開、そして仲違いしていったんは離脱した勇者が再び帰還することによって故郷を奪い返すという内容が多い『ジャングル』における明示的なレベルの内容を考慮すると、七沖関係の隠喩は『ジャングル』において、二面的意味をもっているといえる。すなわち、一方では、表向き同盟しあっている勇者間において実は反目しあう関係性が含まれているという意味であり、もう一方では、そうした反目しあう関係性を同盟の増強に利用できるのだという意味である。

3-2. 謎々にみられる「午」と「子」の七沖

以上は、七沖と動物の「脚」のモチーフをもとに EM 話群の基本話を『ジャングル』の考察に応用したものであるが、実際のところ、七沖そのものは、民間の中に深く根を下ろしているのではないかと考えられる。以下では、このことについて、考察を進めることにしたい。

第2章の EM 話群の考察のなかでは触れなかったが、『元朝秘史』の第284節には EM 話群との類似性を示すような箇所がある。284節においては、チンギス・カンがサルトルの民の征伐へ出発するまえに、チンギス・カンがイエスイ妃にうながされて後継者問題についての家族会議がもたれる。そのさいに長子ジョチと次子チャガタイのあいだで長子ジョチがチンギス・カンの嫡子であるかどうかをめぐり口論が起る。問題の箇所は、チャガタイに対するジョチの次のような発話のなかに現われる。

汗なる父に「(子に) あらず」と云われなかった、お前は私をどうして差別するのか、どんな技能によって勝っているのかお前は、ただ頑冥によって←自分の はて勝っているのみお前は。遠射してお前に劣れば親指(自分の)を切って捨てよう、組合ってお前に負ければ倒れた地から起きあがるまい。汗なる父のお言葉が知るように(小沢 1989: 272)。

ここにおけるジョチの発言は EM 話群に登場する主人公の誓約と印象として酷似している。このことから EM 話群は『元朝秘史』の時代にすでに存在していたのかもしれないと思わせるふしがある²¹。とはいえ、これには少し疑問が残る。その理由は、EM 話群の基本話においては、エルヒー・メルゲンの弓術の腕前は確かに7つの太陽のうち6つを射落としたことに表れているとはいうものの、この話の急所はむしろ、最後の7つ目の太陽を射落とすことに失敗したところに存在するからである。つまり、ジョチの発言が EM 話群を下敷きにしているのであれば、ジョチの発言はあらかじめ最終的な対象を射落とすことができない、すなわち彼がチャガタイに負けるということを含意することになる。これは明らかにジョチの意図とは異なる。

したがって、『元朝秘史』における当該箇所と EM 話群とは直接には関連がないものと

考える必要があろう。当該箇所が存在はむしろ、EM 話群に多く見られる主人公の誓約そのものの原型はすでに『元朝秘史』の成立した13、14世紀にはすでに生活世界の中で用いられるような常套句として存在していたのではないかということを示唆している。それではなぜ、弓術の失敗によってタルバガンになる、というような誓約ができたのであろうか。ここで焦点を当てるべき事柄は、狩りの対象になるのはタルバガンだけでないわけであるから、なぜタルバガンであって、他の動物ではないかということを考えねばなるまい。

ここでヒントとなりそうなのは、EM 話群の基本話において、エルヒー・メルゲンが「親指を切り捨てて、男であることをやめよう」と言っていることである。この「男であることをやめる」ということと「タルバガンになる」ことが同義になっていることに着目するのである。「男であることをやめる」ということは、「女になる」ことであると理解しておく。そして、タルバガンは、口頭伝承のなかで「女性」の隠喩として解釈できるようなのである。例えば、次の(1)や(2)の謎々を参照されたい²²。

- (1) Цээл нөхөнд 淵の穴に／ Цэцэн тарвага 賢いタルバガン
 (2) Цөл нүх 砂漠の穴／ Цүдгэр тарвага 猫背のタルバガン
 Нахийн даваа 湾曲した峠／ Навтгар хормой ずんぐりした裾野

(1)の答えは「家のなかにいる人」、(2)の答えはそれぞれ「家、人、敷居、扉」である。両者は、タルバガンの穴が人間の家、タルバガンが家の中に住む人間になぞらえられていることで共通している。表層的にみれば、どちらもタルバガンは人間を指しているだけであり、女性を特定して指しているわけではない。だが、「伝統的」なモンゴルの生活において、女性は基本的に家にいて育児や乳製品の製造に関わることが期待されてきたわけで

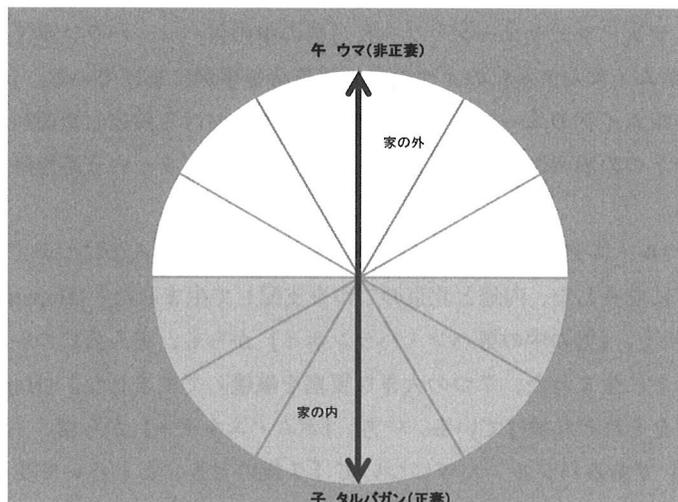


図5：EMの基本話以外にも存在すると考えられる子と午の七冲
 ※↕は七冲を表す

あるから、「家の中にいること」は「女性」を隠喩的に指しているとみてよいであろう。

とくに、このことは、モンゴルの英雄叙事詩の伝承における「馬」が女性の、とくに正妻と対立する非正妻の隠喩となっているという考察と絡めて考えると²³、非常に興味深いことが導かれる。すなわち、馬を「午」に対応させ、その反対側の「子」にタルバガンを置くと、七冲の関係性が導かれるのである。図5を参照されたい。つまり、「家の中にいるタルバガン」を単に「女性」と捉えるよりも、「家の外にいる非正妻」と対立する「家の中にいる正妻」と捉えることができるのである。馬が「非正妻」の隠喩になっているというのは、中国のモンゴル系の土族に伝承する「黒馬」という伝承においても確認されたので、モンゴル人の居住する広い地域で密かに用いられていたと推測できる（藤井2005：215-235）。

以上の考察をとおして言えることは、馬とタルバガンの関係は、午と子の七冲の関係であり、モンゴルの口頭伝承のなかに深く根を下ろしているものだと想像されることである。

3-3. 他の英雄叙事詩に登場する「7歳」の象徴性

前節では、『元朝秘史』と謎々を取り上げたが、『ジャンガル』以外の英雄叙事詩においても「7歳」を七冲の概念の痕跡として考える余地がおおいにある。前述のように、EM話群に登場する主人公エルヒー・メルゲンは、英雄叙事詩の王様とも言われている『ハン・ハランホイ』の主人公であるハン・ハランホイと兄弟であるという風説があるとのことであり、本論の話は英雄叙事詩にひきつけて論じる可能性をもっているので、このあたりを補足しておこう。

英雄叙事詩における「7歳」の意味については、『数のシンボリズム』を著したS. ドラムが「7」の項において取り上げている（Дулам 1999: 133-134）。ここにおいては、『男の中の男ハル・ヌデン・ツェウエーン・フー』、『男の中の男ハン・ハランホイ』、『ジャンガル』、そして『ボム・エルデネ』の4つの英雄叙事詩を事例に挙げている。『ジャンガル』については、カルムイクのエーリヤン・オブランの序における前述した箇所すなわち「7歳の歳に下界の7つの場所の力をそぎ／ドータイ・ジャンガルという名を呼ばしめた」を取り上げている。

『男の中の男ハル・ヌデン・ツェウエーン・フー』からは、主人公について「7歳のときにとどろくほどに成長した、内地と北京の二つを支配して生まれた」（Цэрэнсодном 1982: 152）という箇所を、『男の中の男ハン・ハランホイ』からも、主人公について「7歳のときにとどろくほどに生まれた、7つの大きな要塞を破壊して生まれた」（Нарантуяа 1986: 5）²⁴という箇所をそれぞれ挙げている。一方、『ボム・エルデネ』からは、主人公ではなく「第二の主人公」であるハジル・ハラについて「7歳のときにとどろいて生まれた、目的地には竜巻の馬に乗り、戦いのときには黒い馬に乗り、すべての男を殺して誇りが満足した、すべての女を得て望みがかなったハジル・ハル」（Лувсанбалдан 1997: 28）という箇

所を挙げている²⁵。

これらの事例にもとづいてドラムは、「英雄叙事詩の主人公の7歳というのは、戦いを征し、敵の力を弱める歳である」と言っている (ibid)。さらにドラムは、『男の中の男ハン・ハランホイ』から別の箇所を引いて、7歳というのが敵の力を弱めるだけではなく、逆に、力が弱まるという意味においても用いられることを指摘している。その『ハン・ハランホイ』の指摘箇所を示すと、次のようになる (Нарангуя 1986: 71)。

夜中になったあと、3人でお互いに相手を枕にして寝ていると、天の一抱えの黒い食べ物を毛のないシャルマーニがツェツギー (乳製品の名前——注筆者) を持ってやってきて、天幕の天窓の木枠のうえに座って天幕覆いを破って「ハン・ハランホイ、あなた方3人はいるか？」というのでパッと目が覚めて、「ええ」と言う間に、3年のバターに混ぜた毒、7年の腐って酸っぱい味のするひと抱えの黒い食べ物を口に放り込んで、出入りするのが見えないくらいに姿を消して出て行くと、ハン・ハランホイは外に出て、95の頭をもつ愚かな黒怪物となって須弥山を目指して馬を飛ばしていった (下線筆者)。

ドラム氏は、このひと抱えの黒い食べ物は「7年の腐って酸っぱい味のする」ものでハン・ハランホイのような優れた勇者をも怪物に変えてしまうからには、尋常ならぬ毒物であったのであろうと説明している。そして、注目すべきことは、こうした事例をも踏まえて、「7歳」や“7年”というのは、力が弱まる、あるいは力を弱まらせるという意味のどちらかを象徴する二面的なものである。これは、和解しえない相反する意味ではなく、ひとつのものの二つの側面のようなものである」と書いていることである (Дулам 1999: 134)。なぜなら、ドラムのこの意見は、まさに七沖という概念を別の表現で言い表しているといえるからである。

以上のように、『ジャングル』以外の英雄叙事詩においても「7歳」が用いられており、これらの「7歳」にも七沖の痕跡を認めることができるようにおもわれる。

なお、前述のように、上記の事例にも挙げた『ハン・ハランホイ』の主人公ハン・ハランホイはEM話群における主人公エルヒー・メルゲンとは兄弟であるという風説がある。『ハン・ハランホイ』という英雄叙事詩は『暗闇の王 (小王)』と直訳できることを考慮に入れるならば、エルヒー・メルゲンと兄弟であるのは奇異ではない。なぜなら、本論で考察したように、基本話のエルヒー・メルゲンは「ただひとつの太陽を守る者」としての意味があり、「暗闇の王」との関連で「昼間の王」と呼べるからである。つまり、昼と夜とは「対概念」であるため、このことを比喩的に「兄弟」と詩的に表現した可能性があるのである。

3-4. 補足と今後の課題

最後に、議論が煩瑣になることをおそれて敢えて言及しなかった点を補足しておきたい。たとえば、先に、ホンゴルという勇者を「卯」に対応するとしたが、実は、ホンゴルはしばしば「アルスランギーン арслангийн」すなわち「獅子の」という修飾語をとまなっている。つまり、素直に読めば、「寅」に対応させるほうが近いと思われるので、本稿のアラグダーガ（跳兎）の解釈と相容れないのではないかという疑問が生じるかもしれないことである。こうしたことは、実は、「申」に対応させたサウルにも該当し、サウルは、「フニー・ナチン хүний начин」すなわち「人の隼の」という修飾語を伴っている。こちらも、素直に読めば「酉」に対応させることができ、これもまたここで考察したと矛盾するのである。

また、先の議論においては、サウルやグゼーン・グンベの座席を七沖という概念に関連づけて理解しようとしたが、拙稿のジャンガルの“12勇者”についての考察においても明らかになったように、多くのジャンガルのテキスト間で勇者の座る位置については、右側の第1席に座っているアルタン・チェージ以外に安定している勇者はいない（藤井 2003a: 498-507）。このことを考慮に入れると、サウルやグゼーン・グンベの名前の由来についての先の議論はジャンガル全体について言えるものでは決してないということになる。

とはいえ、『ジャンガル』の“12勇者”論で明らかかなように、『ジャンガル』における隠喩を抽出することには念入りな手続きが必要であるため、一見して指摘できる矛盾だからといって、本稿の考察を一掃することも早計である。むしろ、これらの矛盾をどのように理解するかということは今後検討する必要がある。そのさいに有効な議論として考えられるのは、本稿のEM話群の考察を参考にするのであれば、基本話もしくはそれに準ずる話を発見することである。あるいは、信憑性のある「基準」の構築とそれによる整合性の確認をおこなうというような方向も考えられよう。

いずれにせよ、本稿でEM話群について論じたような、BグループがAグループに対する対抗言説、また、(5)が(4)に対する対抗言説というように形成されたというような考察は、物語の形成には時間的なずれがあるということを示すものである。こうした時間性を考慮に入れるという伝承研究の方向は、エルヒー・メルゲン以上に多くの話を包括する巨大叙事詩群である『ジャンガル』研究においても模索されなければならないであろう。

資料1：(Цэрэнсодном 1989: 47-49)

1. (1) 本文中の記述を参照
2. (2)²⁶

昔々、エルヒー・メルゲン射者が3つの太陽と3つの月が出ているときに、(それらを)射てこの世を暗闇すると言った。ボルハン・バクシは「暗闇にできなければどうするんだ?」と言ったところ、

「黒水を飲まず、老いた草を食まず、岩をうがってもぐります、人間の男に、顎に穴をあけられて鞍にぶら下げられます、親指を切り落とします」と誓約した。すると、ボルハン・バクシは太陽と月の2つの手前に鈴と金剛を置いてずっと座っていた。すると、鈴と金剛の2つに遮られて、ひとつの太陽とひとつの月が残った。それで、エルヒー・メルゲンが誓約どおり、タルバガ（原文ママ）となったのだという。

3. (3)²⁷ 昔、すばるは7つの星であった。この7つの星は、世界を寒くして人びとを凍えさせ震えさせていた。この恐るべき寒さを止まらせようとエルヒー・メルゲン射者が一つの弓で7つの星を破壊して粉々にする。もしできなければ、親指を切り落として、黒水を飲まず、老いた草を食べない太陽や風のところに出て行かない、暗闇の穴にこもって、草の根で食事をして、飢えや渴きを癒すタルバガ（原文ママ以下同様）に生まれ変わって、人間の男の獲物になって暮らすと言った。エルヒー・メルゲンは射って、7つの星のたった一つを打ち落としたので、現在、天のすばるは6つの星となっている。その誓約どおり、エルヒー・メルゲンはタルバガに生まれ変わったという。

資料 2 : (Монгол Ардын Үлгэр 1982: 28-30)

1. 資料1の1. (1) と同一資料なので割愛する。

2. (4)²⁸ タルバガンについて：昔々、タルバガ（原文ママ以下同様）は弓矢を背負って人間を食べていた。こうして、人間や生き物を苦しめていたので、ボルハン・バクシはタルバガの弓矢を引くその親指を切り落として、鎖骨を切って、誓約を取って、「人間の男の鞍紐の食料となれ」といって放したという。タルバガはそれで、「老いた草を食べない、黒水を飲まない、岩場に穴を開けて、人間の男を苦しめて生きていきます」といってタルバガになって、穴を掘って入ってしまった。しかし、ある人が[狩に]行っているときに、弓矢でタルバガを射たところ、(タルバガは) その矢を自分の穴に持って行ってしまった。兄弟や近隣の人たちが一緒になって掘って行って目撃した。タルバガがその穴の隅で弓矢を持った3歳の子供になって座っていたのだという。これよりのち、タルバガを弓矢で殺すのをタブーとするようになった。人間がタルバガを殺して皮をはぐときには、「フン・ヤス（人間骨）」といって鎖骨のところを、「フン・マフ（人間肉）」といって上腕骨のすぐ上の部分のピンク色の肉を、「フン・プール（人間腎臓）」といって2つの腎臓のそばに引付いた小さな肉を必ず分別して捨てる慣わしとなったという。タルバガが昔人間を食べていたので、このような人間の身体の幾つかの器官や肉にそのまま残っているわけだそうだ。

3. (5)
タルバガ（原文ママ以下同様）はどうして指が4本になったのか：原始時代に、一人息子をもった一人の王様が、自分の息子を人から隠して決して見せなかったという。しかし、土地の領民の子供たちを順番に呼びつけては連れてきて、息子の面倒をみさせていたのだが、彼らは家に戻っていくことはなかったという。この尋常ではないことを人はみな聞いて、かなり不思議がっていた。その土地に、一人娘をもつひとりの老婆がいたという。そして、その老婆の娘が、王様の息子の世話をする番になった。母親は自分の娘を王様に送り届けてやるときに、「王様の息子の世話をしているときに食べなさい」と言って自分の胸の乳でつくったアーロール（モンゴルのチーズ）をやった。娘は王様の息子を昼晩なく世話をしているときかなり恐ろしかったけれども、おなががすいたために、母親がくれたアーロールを食べたという。すると、王様の息子はかなり[それを]見ていて、「お前は何を食べているんだ？ 僕にもくれよ。」と言うと、娘はアーロールをやった。息子はアーロールの味を味わって、「こ

んな美味しいものはどこにあるんだ？僕にも見つけてくれよ！」と言ったという。「私のお母さんが作るのよ。」と言うと、「お前、もってきてくれよ！だけど、僕のことを誰にも言ってはいけないよ。もしどうしても言うことになったら、タルバガの穴に大声で叫びなさい」と頼んだという。娘は家に帰ったという。土地の人びとは、その娘が戻ってきたので、かなり驚いて、彼女からいろいろと訳を問いただしたけれども、何も得ることができなかった。とはいえ、娘は悪戯気をおこして草原に出て、タルバガの穴に、「王様の息子はとても醜い。牛のような角がはえていて、野生の猪のような歯をしているわ」と叫んだところ、道行く人たちが聞いてしまった。その後、王様の領民たちは自分の子供たちを行かせて、王様の息子の世話をさせるのをやめた。王様は怒って、その言葉を言ったひとを突きつめると、平原のタルバガが言ったということになった。王様はそのタルバガを生け捕りにしてもってこさせて、5本の指の1本を切り落とさせた。それ以降、タルバガには指が4本あるようになったという。

資料3：ポターニンの採取した6話（Поганин Г. Н. 1883: 179-180）

1. (6) タルバガン（マーモット）は、以前、人間であった。凄腕の猟師がであった。ある日、彼はテルゲナ（肉食の鳥に属する）を殺そうとした。[そして] 発砲し、その尻尾に命中した。そのために、現在、テルゲナの尻尾には裂け目がある。命中しそこなって、タルバガンは自分に呪って、自分の親指を切り取って、地下にもぐりこんだ。そして次のように言った。「一年に4ヶ月だけ暮らせるように！」（サリシン、ウランゴムのドルベト族）

[2.] タルバガン（マーモット）は人間で恐れなしの射手であった。彼は強い獣も含めて、誰をも射抜かないということはなかった。そしてカン・ゲレデイ鳥の翼を撃って傷つけた。このカン・ゲレデイのところで、彼は指を切り落とし、それを地に埋めて言った。「誰もがお前を容赦するように、お前を貧しい人が食べ、鳥獣が引きづりまわすように！」（タラン、チュイスカヤ草原のテレンギットのシャマン）

3. (7) マーモットはかつて人間で、猟師であった。その当時、太陽は3つあった。彼は弓で1つに命中するように照準を合わせたところ、はずしてしまった。怒って、自分の親指を切り落として、地下にもぐった。（コンブ、テル湖のバリク骨のトヴァ・ウリヤンハイ族）

4. (8) マーモットは以前、猟師であった。その頃、太陽は4つあった。ひとつひとつの太陽に沿って、それぞれの場所に天空があった。彼は太陽に対して弓を射って、すでに3つを射た。そのとき、ボルハン・バクシは地上に光がなくなってしまうと恐れて、この猟師をタルバガンに姿を変えた。（ナイディン、ウルガのボクドシャビ集団の人）

5. (9) マーモットはかつて人間でタルバガン・メルゲンという射者であった。彼は馬を持っていた。ある日、彼は言った。自分の的中能力に自信をもって、もし彼がツバメに命中させることがなければ、馬の前足と自分の親指を切り落として、黒い水を飲まず、カモジグサを食べる、地下にもぐろうと。彼は的に当て損なって、ただツバメの尻尾に当たって、そのためにそこに割れ目ができた。タルバガン・メルゲン自身は、穴に住んで、露だけを飲むマーモットに姿を変えて、彼の馬はトビネズミ（原語はアラグダーガ）と変えられた。（ヤコブ・チストヒン、牧師、シムキ村、出自はブリヤート族）

[6.] タルバガンはかつて孤児であった。父母なしに大きくなった。彼から偉大な猟師が出て、この猟師はたくさんの野獣を殲滅した。ウスチュギ・ボルカン（至高至善の神）が怒って、彼の親指を切り落とし、それを（彼自身かそれとも指なのかを語りから明らかにすることはできない——原注）チュ

メンギ・ボルカン（下の神）に放り投げて言った。「お前を、飢えた人びとが撃って、弓を射って、食べるように、お前を野獣が捕らえ、鳥がついばむように。」（トトイ、テレンギト女性、R. チュヤ）

資料 4：（Сказки Бурят Монголии 1997: 101, 117）

(10) 世界に7つか6つかの太陽が現れた。動物や人間は死にそうになった。暑さが恐ろしいほど耐え難い状態になった。人間や動物は水を飲んだり、すばやく手に入れることができなかった。そこで、それを呼び出した、つまりエルヒー・メルゲンを呼び出した。「ほらこの7つか6つの太陽を撃ち抜いて、殲滅してくれ。」そうしたら、「もし私がこの7つの太陽を撃ち抜いて殲滅できなければ、私は老いた草を食べない、ニガヨモギの水も飲まない草原のタルバガンになろう。」そのような誓いを立てた。この後弓を引き始めたがすべてを射ぬくことはできなかった。射抜いて行って、残りのものを命中させたが、ひとつの太陽がそのまま残ったという。この太陽が山のほうに入ったとき、ツバメが飛び出してきて遮った。そのとき、ツバメの尾を撃ち抜いた。そして太陽が沈んだ。その獵師には斑の馬がいた。「自分の斑の馬の脚を切り落とす。もしツバメに追いつかなければ」と言った。ツバメを追跡し始めた。薄暗く、暗くなった。そうして、自分の斑の馬の前脚を切り取った。それ以来、ツバメは馬に乗った人間の前方から、前や後ろに飛ぶようになったということである。それと同時に、人間のホイモルに暮らし始めた。エルヒー・メルゲンは親指を切り取って、タルバガンになった。（C. С. Бардаханов が1986年にモンゴル共和国のフブスグル県のツァガン・ウール村で89歳のドルジン・リンチン氏より記録したもの）

資料 5：ルカーシキン氏のテキスト（ルカーシキン 1937（補遺）：1-3）²⁹

(11) それは遠い遠い昔のことである。まだ私の曾祖父の生まれなかった頃で、いまは唯だシアモの飛砂のみある所に、汁液の多い繁った草が生え、地の下より泉が湧き、水の冷く美しい河が流れ、川々の両岸にキスナヒツジと蒙古の家畜が数え切れない群れをなして牧われた頃のことである。ある日、ハルハー族の非常に貧しい牧者の家族の男子に化身した仏陀の誕生を祝う大きな祭りがあった。この大きな祭典に、蒙古の隅々より人民が乗り込み、祭典のあったダツァンに、沢山の豊かな供物と犠牲が献げられた。その頃は、いずれも豊かに暮らしていた。仏陀と喇嘛の祝福と諸々の奉事と儀式のあった後、闘戯と競技が始まった。競技に加わった凡ての若人のうち、タルバガンという一人の蒙古人が、あらゆる競技の優勝者となった。タルバガンは、その弓の箭を以って、百歩の所にいる弟の頭の上にある小さい赤玉を射とめた。この狙いの正しさと腕の確かさは、此所に集まった者のうち、何人も未だかつて見たことがなく、人々は限りなく狂喜した。成功に酔ったタルバガンは、宴を張って、その友達を悉く招いた。一日を遊び、二日を遊び、恐らく、なお数日も遊び暮らした。したたかにアラク酒を飲み、なお沢山に仔羊の肉を貪り、羽目を外して飲み酔ったタルバガンは、己の勝に誇って、酔った友達たちに向かい、その狙いの正しい矢に適うものは何者もなく、弓の弦が矢の飛出るに必要な力さえ与えようと、どんな標的をも射当てると自慢した。この時、酔った一人の友が、自惚者に向かって、その高言を実際に証拠立てる為に、空を飛ぶ燕を射止めよと申出た。その当時まで、燕は神聖な鳥で、春と暖かさの使いと看做されたから、これを聞いたタルバガンは、危うく地に倒れるばかりであった。しかし自尊心と高慢心は、信仰の念を眩まして、もはや酔醒めたタルバガンは、手に弓を取り、もっとも良い箭を簞より抜いた。人々は小舎を出て、燕の現われを待ち始めた。その頃の燕の尾は、丁度、鋤のように広がった。間もなく、燕が現れて、そのうち一羽は、群がる人々の上を飛んだ。

タルバガンは、狙いを定め、箭叫がすると、弦の音の鎮まる間もなく、燕の尾より羽の小束が抜け、燕は哀れな鳴声を挙げて、ダツァンの開かれた戸に飛去り、仏陀の足下に落ちた。怒りに強い仏陀は、法を犯して鳥を殺したものを引き立てよと命じた。電は閃き、雷は轟き、風は吠え始め、草は地に伏し、人は小舎に崩れ込んで、大仏陀に祈りを捧げた。タルバガンは活仏の王座の前にひれ伏した。「汝は、未聞の罪を犯して、祭りの祭りを潰した。その罰として、この日より汝は地の中に住み、一年のうち六ヶ月は、日の光を見ず、人は汝が聖い燕に行った(原文ママ)ごとく、汝にも行こうべし、汝の地に異国人が現れて、民を虐げ始める日、汝はその子孫とともに、祖国を守る為に起て、汝の箭は、悪敵より蒙古を救わん」と語り終わって、仏陀が手を振ると、ひれ伏したタルバガンの許に、その時以来『タルバガン』と呼ばれる小さい哀れな獣が現れていた。いまに至るまでも、タルバガンは、その『ブタン』の側に立ち、絶えず「ハニ・ハニと叫んで」(原文ママ)、過ぎ行く蒙古人に、仏陀がタルバガンよりその呪いを解く日は来ないかと問うものようである。また燕にも、燕がタルバガンの箭を避け得なかった罰として、恰かも二又の熊手のように篋り取られた尾が永久に残っている。

資料6：Namjil の挙げる6話 (Namjil 2001: 243-249)

1. (1) と同一なので省略する。

2. (12)³⁰

昔々、この世ができる時、世の中には8つの太陽があって、人びとを炎熱に苦しめてどうしようもなかったという。ボルハン・バクシはエルヒー・メルゲン・ハーン(王)を呼んできて、「おまえは太陽を射抜くことができるか?」ときいたところ、エルヒー・メルゲンは「できるとも」と自信満々に答えて、「もしできなければ四本脚のタルバガ(原文ママ以下同様)になって、黒水も飲まず、老いた草も食べない、悪い男の日常の糧となり、いい男の鞍紐を選んで暮らそう」と誓約して、また「射抜いて落として真っ暗闇になればどうするんだ?」と聞き返したところ、ボルハン・バクシは、「それなら、人間を自分自身の光で暮らさせて、おまえを世界の王にしてやろう」と約束したという。そこで、エルヒー・メルゲン王は、たった1本の矢で射ったところ、ボルハン・バクシは慌てて、托鉢の器で1つの太陽をさえぎることに間に合って、袈裟で覆うと、世界が真っ暗闇になったという。エルヒー・メルゲン王は賭けに勝ったとおもっていると、ボルハン・バクシが袈裟と器をとると、1つの太陽が出てきた。それで、エルヒー・メルゲン王は、約束どおりタルバガと姿を変えたという。

3. (2) と同一なので省略する。

4. (13) タルバガ(原文ママ以下同様)・メルゲンは以前、ホルモスタ・テングリの書記であったという。あるとき、左手で文字を書いて書き間違えてホルモスタ・テングリに左手の親指を切り落とされてしまったという。その後、世の中に、3つの太陽が出て人間や動物の喉が乾いて、草や植物が乾ききって、危険な状態になった。ホルモスタ・テングリは、3つの太陽を射落とすために射者を探したところ、タルバガ・メルゲンは、「私が射落とす」と言った。ホルモスタ・テングリは、「おまえが射落とすことができなければ、右手の親指を切り取るぞ俺は」と言うと、タルバガ・メルゲンは、「残った親指を鋭い刀で切り落とさせることはもちろん、黒水を飲めばふりまいて死ぬよ俺は。老いた草を食べればのどにつまらせて死ぬよ俺は。真っ暗な夜に出れば星に打たれて死ぬよ俺は。黒い地面の裂け目に追放されて、俊足の馬に乗った若者の鞍紐から鼻を吊り上げられるよ俺は」と誓約した。そして、焼いていた3つの太陽の2つを射落として、残った1つを射ると、デルヒー・ツァガン・アーウが見ていて、「すべてを射てしまえば、世の中の生き物は太陽なしでどうやってやれよう」

と杖を天のほうに突き刺してしまったところ、矢筒の矢が杖にあたって斜めになり、1つの太陽がそのまま残ったという。それで、タルバガ・メルゲンは右手の親指をも切らせて、黒い地面の裂け目に追放されて、すべての生き物の糧となって、自分でした誓約どおりに、真っ暗な夜に外に出るのを止めて、黒水を飲むのを止めて、老いた草を食べるのを止めたという。

5. (14)³¹ 昔々、兄弟7人がいた。兄弟6人は天に上がって昴となった。もうひとりの弓射に長けた弟(メルゲン・ハルワーチ)は、太陽と月とを射落とそうと言った。「射落とすことができなければ、親指を切ることはもちろん、黒水を飲めば喉の渇きで死のう。老いた草を食べればむせて死のう」と誓約をしたという。弓射に長けた弟は太陽と月を射落とすことができなかったので、親指を切って、黒水を飲まない、老いた草を食べないタルバガ(原文ママ)となったという。

6. (15)³² 半拉山(ハムラヤマ)の故事: ウネン(ウネンは「真実」「誠」という意——筆者注)は、民衆のために、様々な敵を倒した勇敢な勇者であった。ある夜、突然、12個の太陽が同時に昇り、人びとを焼きつくばかりとなった。これはホルモスタ・テングリが人間界にまいた災いの危害だということをウネンは知った。人びとはたくさんの太陽を射落としてくれと頼んだところ、ウネンは弓を引いて、矢をつがえて、射たところ、天地が揺らぐほど大きな音が鳴って、1つの太陽が地に落ちた。もう11個の太陽は四方にばらばらに逃げたけれども、ホルモスタ・テングリの命令にそむくことはできないので、行ってしまわず、またもどって出てきた。ウネンは、また引き続き、3度射て、3個の太陽を落とした。残ったその太陽たちは死ぬほど恐れて、あちこちに逃げていた。ウネンは、また引き続き、5個の太陽を射落とした。ホルモスタ・テングリは、大いに怒って、ひとつの大きな高い山をウネンの頭の上に倒した。ウネンが頭をすこし斜めにすると同時にその山は左肩の上に載った。ウネンは高い山を左肩で担いだままそのまま太陽を引き続いて射って、また1つの太陽を撃ち落した。ホルモスタ・テングリは怒り心頭に達し、またひとつの山を打ち下ろしたところ、ウネンは右肩の上に担ぎあげて、またもう1つの太陽を射落とした。いちばん最後の1つの太陽を射ようとしたところ、残ったその太陽が、「私を残さなければこの世は常に真っ暗闇になります」と言って命乞いをしたところ、ウネンはようやく気づいて射るのを止めた。また、1つの山が降ってきて、彼の頭の上に命中して押し倒した。日照りの危険から逃れた人びとはホルモスタ・テングリの命令にしたがわず、山に圧されてしまったウネンを救出しようと、山を掘って半ばあたりになったところ、ホルモスタ・テングリは彼らに悪疫をまき、多くの人びとを死に至らしめた。ウネンの遺体は薬草となって生えてきて、人々の悪疫を治したという。

資料7: ラムステッド氏のテキスト (Ramstedt 1974: 162-163)

(16) 昔、エルヒー・メルゲンという男がいた。その当時、3つの太陽があった。男はその2つを射落とした。(残りの一筆者注) ひとつを射ようとしたが、できなかった。というのは、すぐに仏陀が袈裟を空中に引掛けたからである。男は土の中にもぐり、黄色っぽい琥珀色の1匹のタルバガンに変身した。それは黒水も飲むことも許されず、干草も食べることが許されない(毎年6ヶ月の間)。そしてタルバガンはどの人間の食料にでもなる。(ここで原文改行—筆者注) タルバガンを人は矢で射ることは許されない。人間が射ると、その射た人自身がタルバガンになってしまうのだ。前脚のあいだに、タルバガンはまだ人間の肉を残している。その肉は食べるのにふさわしくない。人間はその他の部分の肉を食べるのが普通なのじゃないか。

注

- 1) これは、基本話の解説にツェレンソドノム氏が記していることである (Цэрэнсодном 1982: 330)。
- 2) モンゴル国においてもジャンガルに関する伝承は採録されているが、主たる伝承地とはなっていないといえる。ただし、このことはモンゴル国におけるジャンガルの伝承がジャンガル研究にとって重要性がないということの意味しているわけではない。
- 3) たとえば、(藤井 2001) において対象にした『アルタイ・ハイラハ』というドルベト集団に伝わる英雄叙事詩における仏王の377歳の年齢についての考察がそれに当たる。この考察にも関連する (藤井 2003b: 127-202) における『ウバシ・ホнтаイジ伝』において登場する各集団の兵数や、登場人物の年齢についての一連の考察もこれに加えることができる。
- 4) このことはカルムイクのエーリヤン・オブランソンのテキストと新疆のアリンピルのテキストで容易に確かめることができる。
- 5) 議論が煩雑なため、ここでは詳細には触れない。詳細は (藤井 2003a: 483-607) を参照。
- 6) (Жанһр 1990: 17) を参照。
- 7) 原山煌によると、中国語で「跳兔」と称されるものは、実際にはトビネズミのことを指しており、前肢にくらべて桁はずれに大きい後肢を持つ姿から、兔を連想して付された俗称であるとのことである。ちなみに、トビウサギなるものは存在するが、中央ユーラシアには棲息しないとのこと、それよりもずっと小型の中央ユーラシアのトビネズミとはまったく別の動物であるという。前近代の東アジアでは、トビウサギという動物については知るよしもないので、「跳兔」という俗称はやむをえないところがあったという (原山 1999: 76)。
- 8) (1) の物語をモンゴルの伝承研究者フレルシャは5種類の資料、すなわち本稿における (1) (12) (13) (14) (15) に基づき、また同じくモンゴルの伝承研究者ナムジルはフレルシャの資料5点に本稿の (2) を加えた6種類の資料に基づいてエルヒー・メルゲン論を展開しており (Kürelša 2004: 104-138, Namjil 2001: 242-259)、両者ともこの (1) を最も完成度の高い物語であるとしている。
- 9) 昴は、プレイアデス星団と呼ばれ、ギリシャ神話では7人の乙女である。狩人オリオンはこのプレイアデスの7人の乙女に恋心を抱き彼女たちを追いかけた。だが彼女たちはみな逃げて星になったという。オリオンが空でプレイアデスを追っているように見えるのはそのためだという (マイケル・グラント, ジョン・ハイゼル 1988: 185-187)。ただし、プレイアデスの乙女たちが星になった経緯については諸説あり、オリオンとの関係で物語るのはそのひとつである (ibid: 445)。とはいえ、狩人オリオンの次の伝説はエルヒー・メルゲンと遠い類縁関係があるようにも思われる。プレイアデスの7人の娘のひとりメロペであるが (ibid: 445)、このメロペの登場するオリオン伝説によれば、キオス島に赴いたオリオンは、そこの王にもし彼が島から野獣を追い出してくれるなら、娘メロペを与えると約束した。オリオンは約束どおり野獣を追い出した。しかしあとになって王はその約束をくつがえした。そこでオリオンが酔ってメロペを犯すと、王は彼を盲目にし、海辺に彼を放り出した。オリオンは立ち上がり、レムノス島までかろうじて歩いて渡った。そこのヘパイストスの鍛冶場で、ケダリオンという少年を拾い上げて肩に乗せると、オリオンは少年を案内役にして海に入り、太陽の光線めがけて東方へと歩いていった。光線は彼の視力を回復させた (ibid: 185)。

- 10) アムール下流域、沿海州、サハリン一帯の諸民族における射日神話を考察した荻原真子はポターニンの資料しか用いていないものの、チュルク・モンゴル諸族の射日神話を、名射者（メルゲン）のモルモット変身伝承の一部として捉えており、モンゴルにおけるエルヒー・メルゲン話群の特徴を適確に捉えているといえる（荻原 1996：87）。
- 11) ミダス王に関わる伝説はいくつかあるが、そのひとつはアポロンとパン（ないしは別の説によればマルシユアス）とのあいだの音楽競争にまつわる次のような話である。審判官だったトモロスがアポロンに軍配をあげたとき、ミダスが反対の意を表明したので、アポロンはミダスの愚かさに対して彼にロバの耳を与えた。ミダスはブリュギア帽をかぶってあらゆる人々の目から恥を隠すのに成功したが、床屋にだけは耳を見せざるをえなかった。秘密を守らなければ死刑だと脅されてはいたが、床屋は黙っていることができず、地面に穴を掘って秘密を穴の奥へ吹き、穴を埋めた。ミダスにとって不幸なことに、その地面から葦が生え、その風にないだとき、葦は全世界に向かって「ミダス王の耳はロバの耳！」とささやいたのである（マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル 1988：546-547）。
- 12) (藤井 2003b：240) で記したように、「二重の意味構造」という特徴は、英雄叙事詩というジャンルに特有のものではないということを述べておく必要がある。「二重の意味構造」はあくまでも「二重の意味構造」であって、既存のどのジャンルに対応させるかということは重要な論点ではない。したがって、本稿では「神話」「伝説」「民話」「英雄叙事詩」「説話」というように記述してあるが、これはあくまでも指標に留めるべきジャンル分けであって決して重要視してはならない。それゆえ、ここでは、「各種の伝承」という表現をとっている。
- 13) 『アルタイ讃歌』のテキストは、(藤井 2001：372-385) を参照。
- 14) 江戸期昔話研究者の内々崎有里子氏によると、刊行年がわかる文献資料で現存する最も古い日本の「桃太郎」は、享保8年（1723年刊）の絵本『もも太郎』であるが、ここには鬼退治で太郎が仲間とする動物として猿・犬・雉が登場する（内々崎 1999：46、92-93）。これらの動物にも「方合」が認められ、これらは申-酉-戌の「西の方合」と考えられる。このように、「方合」は日本も認められる発想であり、モンゴルにのみ特有のものではないらしい。
- 15) たとえば、エルヒー・メルゲン話群と対応すると考えられる、中国における射日神話群については百田弥栄子氏が詳細に論じているが（百田 1988：48-78、2004：113-121）、タルバガンの登場する話は1話もない。
- 16) この背景には、「ドクシン・ハル・サナル」という「サナル」と略称される別の勇者が存在していることも関係しているのだと思われる。
- 17) (Большой Академический Монгольско-Русский Словарь (В Четырех Томах) 2002: 104) においては、1. 「灰黄で尾とたてがみが黒い」「ブロンドの」「明るい黄色の」「茸毛の」「(馬について) 薄栗毛の」、2. 「純朴な」「無邪気な」「お人よしの」「温厚な」「親切な」「感じのよい」「親愛な」「可愛らしい」といった意味が挙げられている。
- 18) エルヒー・メルゲン話群以外においても、下肢の特徴に着目したこうした動物認識に準ずる事例として、モンゴルの「馬」に関係するなぞなぞを挙げることができる。「足かせのついた馬」を答えとするなぞなぞがあるが、これはモンゴルで馬の足かせとして用いられるチュドウルが4本のうち3本を縛ることに注目しているのである。なお、モンゴルにおける馬関連のなぞなぞについては、(藤井 2006：133-143) を参照。

- 19) ここで付した意味は、*Калмыцко-Русский Словарь* からのものである (*Калмыцко-Русский Словарь* 1977: 149)。ここには、2つの意味が載せられてあり、もうひとつの意味は「花の名前」である。
- 20) エーリヤン・オブランの序においては、「ミンヤン」という勇者が登場するが、なぜかこの勇者には座席が与えられていない。座席の配置からみると、このサナルとちょうど対角線上にある「未」の位置である、サワルの次席が空白である。これについても意味があることなのかどうかは今後考察されるべき問題である。
- 21) たとえば、ガーデンバは『元朝秘史』におけるこの箇所を取り上げて、エルヒー・メルゲンはモンゴル人の素朴な想像をあらわした非常に古い時代の神話であることを物語る証拠とみている (Гаадамба 1990: 124)。
- 22) ここで引いた事例は、ガーデンバの著作に触発されて引くものである (Гаадамба 1990: 124)。
- 23) 馬が非正妻の隠喩になっているのではないかという議論を私は多くの論文で示してきたが、その根底になった議論として馬頭琴伝説があるので、それを参照にされたい (藤井 2003b: 11-38)。
- 24) ドラム氏の原文では本稿における文献の提示とはちがいが、英雄叙事詩名で文献が挙げられている。
- 25) ドラム氏の原文では、1985年の Б. Каруу の書籍を挙げているが、筆者は未見であるので、別の『ボム・エルデネ』の版で確かめたものを掲載しておく。両者は若干語句に異同があるらしいが、どちらも М. Палчин という有名な英雄叙事詩の語り手の写本をもとにしているとおもわれる。この写本は (Загдсүрэн 1972: 25-186) に掲載されている。
- 26) Цэрэнсодном によると、これは、1919年に刊行された Потанин Г. Н. の『モンゴルの民話伝説』という書物からモンゴル語に翻訳したものであるとのことである。Потанин Г. Н. は、これをサン・バイシーン・ホショーのフイテン湖という場所に住んでいるハルハ人から記録したという (Цэрэнсодном 1989: 200)。
- 27) Цэрэнсодном によると、これはオブス県ウムヌゴビ村の牧民トゥブシニー・ドブチン、ホブド県のボヤント村のネゲデル員のドゥゲリーン・ベフネーたちから書き取った神話をひとつのものにして綴ったものである (Цэрэнсодном 1989: 200)。
- 28) これはモンゴル国のホブド県ドート村の牧民で英雄叙事詩の語りであるスヒーシ・チョイスレンの語ったものである。
- 29) これは、1930年代、ハルビンの旧東省文物研究所博物館の館長であったルカーシキンがブリヤート＝モンゴル人から聴取したもので、上記の日本語は未刊行の手稿本のロシア語から北滿經濟調査所が邦訳したものである。なお、原文の表記は現代仮名遣いに変えた。
- 30) 典拠は、Punsuγwanjil nar čuγlγulun emkedegsen 《Sačali mergen qayan》, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a, 1986, pp. 731-733.
- 31) 典拠は資料3と同様のポターニンの採集したものというが、詳細は不明である。
- 32) 典拠は、『蒙古族民間故事選』上海文艺出版社、1989年版 pp. 131-132。これは、ジョー・オド盟のリン・シ・シャン付近に流布した「バラ山伝説」という山水伝説となったヴァリエントである (Namjil 2001: 248)。

引用文献

- Большой Академический Монгольско-Русский Словарь (В Четырех Томах), 2002, Институт Языка и Литературы Академии Наук Монголии Институт Языкознания Российской Академии Наук, Том IV X-Я, Москва 《ACADEMIA》
- Сказки Бурят Монголии, 1997, Российская Академия Наук Сибирское Отделение Бурятский Научный Центр Институт общественных Наук, Улан-Удэ.
- Дулам, С., 1999, Монгол Бэлгэдэл Зүй, Тэргүүн дэвтэр, Тооны Бэлгэдэл Зүй, Монгол Улсын Их Сургууль Монгол Судлалын Сургууль Нүүдэл Соёл Иргэншил Судлалын Төв, Улаанбаатар
- 藤井麻湖, 2001, 『伝承の喪失と構造分析の行方——モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』 日本エディタースクール出版部
- , 2003a, 「英雄叙事詩『ジャンガル』における“12勇者”——モンゴル英雄叙事詩の数詞解釈」 国立民族学博物館研究報告27 (3)
- , 2003b, 『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』 風響社
- , 2005, 「中国青海省土族の民話『黒馬』における隠された物語」 『ユーラシア草原からのメッセージ——遊牧研究の最前線』 松原正毅・小長谷有紀・楊海英編著 平凡社
- , 2006, 「謎々における馬——モンゴル英雄叙事詩の隠喩研究の補完として——」 『言語文化学会論叢』 27号
- Гаадамба, Ш., 1990, Монголын Нууц Товчооны Судлалын Зарим Асуудал, Улсын Хэвлэлийн Газар
- 原山焯, 1999, 「タルバガン、野に満ちし頃」 『国立民族学博物館研究報告別冊』 20号
- Калмыцко-Русский Словарь, 1977, Калмыцко-Русский Словарь, Под редакцией Б.Муниева, Издательство 《Русский Язык》, Москва
- Жанһр, 1990, Жанһр Хальмг Баатарлг Эпос, Ясврнь Басцга Б.Б., Хальмг Дэгтр һарһач, Элст Күрөһа, 2004, Mongyul domuγ-un soyul sudulul (蒙古神話伝説的文化研究) 民族出版社 北京
- Лувсанбалдан, Ха., 1997, Бурхан Хаан Аавтай, Бурам Хатан Ээжтэй Эрийн Сайн Бум Эрдэнэ-ийн Ес/өн/ Бөлөг Оршив, Анхны Хэвлэл, Редактор Г. Гантогтох, Интерпресс Хэвлэлийн Компанид Хэвлэв.
- マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル (共著)、1988, 『ギリシャ・ローマ神話辞典』 入江和生・木宮直仁・中道子・西田実・丹羽隆子, 西田実 (主幹) 大修館書店
- 百田弥栄子, 1988, 「射日・招日神話にかかる鍛冶文化の諸相」 『説話の始原・変容』 桜楓社
- , 2004, 「第4章 射日神話と洪水神話」 『中国神話の構造』 三弥井書店
- Монгол Ардын Үлгэр, 1982, Д. Цэрэнсодном эмхтгэж, удиртгал, тайлбар бичив, профессор А. Лувсандэндэв редакторлав, БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл Зохиолын Хүрээлэн, Улсын Хэвлэлийн Газар, Улаанбаатар
- Namjil (那木吉拉), 2001, Mongyul domuγ-un qaricaγuluγsan sudulul — Mongyul üliger domuγ-un qaricaγuluγsan sudulul (nige) (蒙古神話比較研究) 民族出版社 北京 (ウイグル式蒙古語)
- Нарантуяа, Р., 1986, Эрийн Сайн Хан Харангуй (Нэгтгэсэн Эх) Гар бичмэл эхүүдийг харьцуулан боловсруулж, оршил бичиж, тайлбар сэлт үйлдсэн Р. Нарантуяа, БНМАУ Ардын Боловсролын Яамны Сурах Бичиг, Сэтгүүлийн Нэгдсэн Редакцын Газар,

Улаанбаатар

- 萩原真子、1996、『北方諸民族の世界観——アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』草風館
- 小沢重男、1989、『元朝秘史全訳続攷(下)』卷十一 風間書房
- Потанин, Г. Н., 1883, Очерки Северо Западной Монголий, Результаты Путешествія, исполненнаго в 1879 году по поручению Императорскаго Русскаго Географическаго Общества, Выпуск IV, С, Петербург.
- Ramstedt, G. J., 1974, Nordmongolische Volksdichtung, Gesammelt von G. J. Ramstedt, Bearbeitet, Übersetzt und Herausgegeben von Harry Halén, Band II, Helsinki, Suomalais-Ugrilainen Seura
- ルカーシキン、ア. エス.、1937、『タルバガン』(北経調査刊行所第十二号) 哈爾濱鐵路局北滿經濟調査書訳(未刊行の手稿本の訳)
- 塔亜. D.、1999、『アリンピルの『ジャンガル』——新疆オイラト・モンゴルの英雄叙事詩』採録・解説 D. 塔亜、千葉大学ユーラシア言語文化論集別冊第1号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座(テキストはウイグル式蒙古文、解説は日本語)
- Цэрэнсодном Д., 1989, Монгол Ардн Домог—Үлгэр, Редактор Х. Сампилдэндэв, Ц. Шүгэр, Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл Зохиолын Хүрээлэн, Улсын Хэвлэлийн Газар, Улаанбаатар
- 内々崎有里子、1999、「第1章 桃太郎」『江戸期昔話絵本の研究と資料』三弥井書店
- Загдсүрэн, У., 1972, Аман Зохиол Судлал, Studia Folclorica Instituti Linguae Et Literarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici, Tomus VII Fasciculus 10, Хэвлэлд бэлтгэсэн У. Загдсүрэн, Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэл, Улаанбаатар

(FUJII Mako)